十月興行

非常時の現下に即し八ヶ月振りに握手せる

三巨頭若手揃

文樂座人形淨瑠璃

一部 金十五錢

文樂座

四ツ橋

津太夫、古靱太夫
八ヶ月振りの握手

文樂の十月興行

秋も深みてよろしき候みなさまには益々御健勝にあらせられ欣慶に存上げます。さて、十月の文樂は八ヶ月振に握手せる津太夫・古靱太夫の朗らかな合同出演に土佐太夫他精鋭若手連總出演の盛華の陣容で二名人の意義深い妹脊山の掛合をはじめ絶好の番組揃ひでございます。寔に豊けき今秋の物獲と信じます、みなさま御誘合され賑々しくおはこび下さいますやうに。

昭和八年十月

文樂座

昭和八年十月一日初日
初日　午後三時開幕
二日目より　午後四時開幕

・御觀覽料・

一等椅子席　御一名　金三圓
二等席　御一名　金一圓五十錢
三等席　御一名　金八十錢
（お座席へお直りは金五十錢上り）

一等お座席
一等椅子席は五日前より
前賣切符發賣致居候
前賣切符
專用電話　南四七一一番
電話　南七四〇八番
三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越を願ひます。

本誌へカツト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希ます

あらゆる印刷
永井日英堂印刷所
大阪市西區土佐堀通一丁目
長三四九四
三八〇四一
番
番
番
（44）土佐堀

十月本格興行

文樂座人形淨瑠璃

豫定時間表

（左記時間は二日目よりの豫定）

菅原傳授手習鑑

車場の段（三時より三時二十五分まで）

幕間五分

茶筌酒の段（三時三十分より四時五分まで）

喧嘩の段（四時五分より四時二十分まで）

櫻丸切腹の段（四時二十分より五時二十分）で）

幕間二十分

妹脊山婦女庭訓

妹山脊山の段（五時四十分より七時三十分まで）

幕間十五分

心中天網島

河庄の段（七時四十五分より九時五分まで）

幕間十分

三十三間堂棟由來

（九時十五分より十時三十五分まで）

若手競技興行に就て

木谷蓬吟

九月の文樂座は若手の競技興行が催された。番組も四回に分けられ、リーグ式に各自競ふてその技倆を奮ふのであるから、熱と活氣と、力と眞劍味とに充滿して、いさゝかの職業意識も見へず、非常に愉快に聽くことが出來た。

若い人たち――それは次の時代の文樂座を背負ふて行かねばならぬ責任のある人々である。この新進たちをしツカリと腕を磨かせ、技藝の進展を圖るには、かうした企圖が最も機宜に適ふたものだと信ずる。平常の興行には、わづか十分か十五分しか語れない、彈かれないと云つた人たちが一時間も語り、彈くし、常には到底口にも手にも懸けることの出來ない大物の役場を勤るのであるから、その緊張ぶりと云つたら、本當に死力を盡くしての奮鬪激戰である。そこに自然と技藝の進歩がある。願はくば一年中の總興行の內、其半數は若手奬勵競技的興行の開催と云ふことにしたいものである。

今回のは、一日に四種の藝題を並べ、選手は各三日宛勤めて次の選手と交代し、それが又同藝題の下に競演し、四回を以て完了するといふ仕組みである。一面は技藝奬勵であり一面は興行である關係上この方法に由つたことに無理もないが、若し一日一藝題と定め、それを幾人かの同等技倆の選手をして引續き出演せしめることが出來たら、立ちどころに其技藝の優劣が判つて、頗る効果的で興味更に深いものがあらう。然かしてこれは興行としては勿論出來ない相談であるから、いつか非興行式に、若手の實力を審査するといふ純粹な目的の爲めに實行されれば面白いと思ふ。

所演の藝題は、朝顏日記宿屋、鎌倉三代記八ツ目、女舞衣酒屋、双蝶々引窓と、切に御所櫻三段目の掛合を添えてゐる。藝題の選定、各人の配役も當を得て居り、言ふに言はれぬ若心の痕さへ見へて、同情に値ひするが、更に慾を付け加へれば、第一級にある若手たちにはモツと大物難役を與へて欲しかつた事である。例へば菅原の寺子屋とか、忠臣藏四段目とか、千本櫻鮓屋だとか伊賀越の岡崎とか云つたものを……そして猛烈な稽古に沒頭させる、困らせる泣かせる、難行苦行させるのである。そしてウンと實力を付けさしたい、或は重荷を背負ひ切れず破綻を來たす者もあらう、悲鳴を上げて敗北する者もあらうが、そこが即ち修行であり練磨であると識れば、結局その身の爲めであり、延ひては斯道の眞獻ともなるのである。今度の鎌倉三代記の如きは、所謂勞多くして功少

き狂言ではあるが、この見地からすると、案外役に立つたかも知れないこの場合は太夫も三味線も、實は大童になつての修羅の巷の戰ひであつた。

朝顔の宿屋は、餘りに平凡な課題であつたが、引窓と酒屋とは適當な問題であつた。同じ藝題でも、語り手に由つて違つた味と、變つた表現が見へるから甚だ興味がある。又、その稽古臺（師範　の指導ぶりが、ハツキリと再現して見へるのも面白く、その指南番の政右衛門か林左衛門かも想像できるので更に面白い。

さて、私は、何の氣もなく九月十一日、第一組の第三日目を聽きに行たが、緊張し切つた各演技者の、血みどろになつての奮戰に驚かされ、常の興行には味ふことの出來ぬ眞劍な意氣込に惹きづられ、近來にない感激に打たれたことであつた。そこで、ふと思ひ付いて、此の勇壯な戰士の偉勳に對して、何等か表彰の實を擧げたいと考へた。幸ひ私の家には、亡父が丹精凝らして蒐集した古名人の舞臺使用の床本が襲藏されてゐる。これは武士なれば千軍萬馬の戰場を歷た武具甲冑に均しきものでこの社會には此上もない至寶であるから、これを活用して優秀者に贈呈することに極めた。そこで競技戰四回に亘つて殆どその全部を聽くことにした（たゞ朝顔の舟別れと切の御所櫻の掛合だけは都合で聽かれなかつた）。近來餘り文樂を覗かなかつた私に執つては、なか〳〵の勉强ぶりであつた、これも若手たちの眞劍さに釣り込まれたのだと思ふと、忙しい目をしながらも、やはり嬉しかつた。

充分氣を入れて精細に聽き比べた一人一題毎に點數を附けて見た、そして其合計點の最高者を拔き上げたが、その結果、實力相拮抗した優秀者二組（四名）の代表的名手を獲たつばめ太夫（芳之助）相生太夫（清二郎）がそれであつた。尤も三味線の入撰に就ては、本來三味線は太夫の女房役であつて、內助の役割を勤めるのが元祖義太夫以來の本義であるに準據して、優秀太夫の配偶者を撰に入れた次第である。三味線單獨では、他にも優れた彈き手があるにはあつたが、そんな譯で割愛した。

大體私の審査の目標は、其人の持つ實力と、前途に望みをかける事の出來ると思ふ藝の持ち主を、目懸けての試みであつたから、自然、現在に於て既に或る程度で堅まつてしまうた人や、若手の域を超へた老手と云つた人たちは撰外に置かざるを得なかつた。また、端場を受持つた第二級の若手たちの中からも、それ相當の掘出し物を獲たいものと努めたが、遺憾ながら其意を得なかつた。此等の人々には層一層の奮發を望んで置きたい。勿論優秀入撰の人たちにしても、單に今次の競技戰の覇者たるに止るのであつて、上には上の名匠があり、行く手の途は遠くて而かも嶮岨である、油斷をすれば忽ち墜落、氣を引き締めて向上の一路に精進せられたい。

撰に洩れた若手たちの中にも、力演熱演、推奬するに足る人々も數あ

つたが、惜いかなまだ練習や考へ方に不充分な點が多い。全體を通じて聽いた內から、これはと感じた二三の缺點を上げて見ると、腹は可なりに出來て居ながら音聲の不鍛練な爲め功果が擧がらなかつたもの、美聲はありながらナマな調子に妨げられたり、地藝に練りの足らないもの、餘りに念入りに語る爲めダレたがつたり、工夫がない爲め情味が皆無と云つたのもある。第二級の人の中にも天稟の美音の持主や、案外言葉づかひの巧い人もあり、指導宜しきを得ば將來有望の組に加はることが出來やうと思はれた者もあつた。

要するに、熱演力演は認め得るが音聲の練磨が不充分であること、特に心持、情味の研究に欠ける事などを痛感した——これは今度の若手ばかりに限つて言ふのではないが——尤も若手の特色は、其熱演力演の素晴らしい魅力にもあることは勿論であるが、それだけでは將來が心細いよろしく表現技巧や內容充實と云ふ方面へも踏ん込んで行かずばなるまい。たとへば心持に或る感奮を喚び起しながら、又は切實に情味を解しながらも、その表現法に研究不足の爲め一向に功果が浮き上らない實例を多く見受ける。これは無論自己開眼の必要なのは言ふを俟たないが、一つには古名人の遺して置いた口傳秘訣、良い型などを識ることが捷徑であり早學問となるのである、此等を識らない爲め無駄骨を折つて廻路を廻つたり、面白く語れるところを面白く無くしたり、彈きどころを素通りしたりなどして、干からびた佛藝になり、大事な情趣が生き埋めになるのである。そこで　現存の古老先輩と言はれる人は、物惜しみせず覺えたゞけの口傳秘傳を、胸襟を明け放して後進に傳授するやうにありたいものである。これは今度の引窓や酒屋を聽い痛て切に感じた事でもある。

以上はホンの思ひ出るまゝの漫談に過ぎないが、兎に角、この競技式の技藝奬勵法は、有意義な良策であると認めてよい。願はくば一時的の際物興行に終らないやうに、年幾回かの定例興行として、專ら新進擡頭の舞臺に供したいものである。かくて三年五年と續けるうちに、或は又どんな名手が現はれて出るかも知れない。名人待望の聲の高い非常時淨瑠璃の現狀に徵しても、まことに適切緊急な一と仕事たるに疑ひはない。これが爲めには、文樂當局は言ふまでもなく、斯界の先輩、古老の師匠たち、それに外部の識者、愛好者など、內外呼應しての協力應援を冀ふて止まない。

尙ほ優秀者に對し、賞狀に副へ贈呈した賞品は左の通りである。

つばめ太夫——初代古靱太夫舞臺使用本、三日太平記嘉平次住家

相生太夫——八代染太夫同上、八島日記日向島

芳之助——團平譜章入五行本、妹脊山鱶七上使

清二郎——廣助同上、信仰記金閣寺碁立

車先の段

菅原傳授手習鑑

車塲の段
茶筌酒の段
喧嘩の段
櫻丸切腹の段

車塲の段

松王丸（竹本相生太夫）
梅王丸（竹本鏡太夫）
櫻丸（竹本源路太夫）
杉王丸（豊竹辰太夫）
時平公（豊竹和泉太夫）
鶴澤叶
豊澤廣助

この淨瑠璃は延享三年八月竹本座初演に初まり、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳等の合作で、當時竹本座の衰運挽回のために作者達は天滿宮へ祈願を籠め必死の覺悟で各自分擔書下したのがこの淨瑠璃で果然好評で翌年三月まで打續け、竹本座を再び隆盛にした因緣深い狂言である、殊にこの淨瑠璃に於て興味を覺ゆるのは『骨肉の別れ』といふ同じ題目の下に各持場を定めて筆を執つた即ち『道明寺（相亟名殘りの段）』は松洛『佐太村櫻丸切腹の段』は千柳『寺子屋（松王首實檢の段）』は出雲と三人の作者が腕比べをした逸話が貽されてゐる。

（床本）車先の段

鳥の子の巣にはなれ魚陸に上るさは涙人の身の喩へ種、菅相丞の舍人梅王丸、主君流罪なされてより都の事共取賭ひ、御臺のお行衛尋ねんと笠ふかゝ〳〵と深綠土手の並木に差しかゝれば、向ふからも深編笠、我に違はぬ其出立、互ひにそれぞと近く寄梅王丸か、コレハ〳〵櫻丸、ヤレそちに逢たかつた、マア咄す事聞く事有りと、兄弟こかげに笠傾け、扨先間其方は日外加茂堤より宮姫君の御

人形

梅王丸　吉田玉幸
松王丸　吉田玉松
櫻丸　桐竹紋十郎
時平公　桐竹門造
杉王丸　吉田玉徳
仕丁　大ぜい

後したひ尋ね行きしと、内室八重のものがたり、何とお二方に尋ね逢たか、成程道にて追付奉り菅相丞御流罪と聞より對面なさしめ奉らんと安居の岸まで御供せしに、御對面かなはず、輝國殿の計ひにて、御歸洛願ひの妨けと御二方の御縁も切られ姫君は土師の里伯母君の方へ御出、齋世の宮樣は法皇の御所へ供奉し奉り事治りしといひながら、納らぬは我身の上、冥加に叶ひお車を引く其有難い事打わすれ、賤しい身にて戀の取持、終には御身の怨となり、宮御謀叛と讒言の種拵へ御恩請たる菅相丞樣流罪にならせ賜ひしも、皆此櫻丸がなす業と思へば胸もはり裂如くけふや切腹、あすや命を捨ふかと思ひ詰はつめたれど、佐太におはする一人の親人、今年七十の賀を祝ひ兄弟三人嫁三人並べて見ると當春より悦び勇おはするに、我一人缺るならば不忠の上に不孝の罪、せめて御祝儀祝ふた上と詮なき命けふまでもながらへる面目なき推量れ梅王と拳をにぎり齒をくひしめ、先非を悔たる其有樣、梅王もまりと暫し詞もなかりしが、チヽ道理〳〵我とても主君流罪に逢賜ふ上は者にとゞまる筈なけれど、御館沒落以後御塞樣のお行衛しれず先づ此方を尋れふか筑紫の配所へ行ふかと、取つゝ置いつ心はゝやれど其方がいふごとく、年寄つた親人の七十の賀の祝ひも此月これも心にかゝる故思はず延引互に思ひは須彌大海、ぜひもなき世の有

樣と、兄弟顏を見合はせて涙催す折からに、鐵棒引て先拂ひ先退て片寄れと雜式がいかつ聲、梅王立寄どなたぞと尋ねば本院の左大臣時平公吉田への御參籠出しやばつて鐵棒くらふなと、いひ捨て急ぎ行く、何と聞たか櫻丸齋世の宮菅相亟を憂目に逢せし時平の大臣存分いはふじや有るまいか、成程〳〵、よい所で出つくはしたと兄弟道の左右に別れ尻引つからげ身がまへし今や來たると。

(床本) 車塲の段

程なく轟く車の音商人旅人も道をよきる時平の大臣が路次の行粧さながら君の御幸の如く隨身菅侍前後に列し大路せばしと喝らせたり。兩人こかげを飛び出て車やらぬ〳〵と立ふさがるヤア何者なれば狼籍する見れば松王が兄弟梅王丸櫻丸ムヽ聞へた主に放れ扶持にはなれ氣が違ふての狼籍か但しは又此車時平公と知つてとめたかしらひでとめたかへん答次第用捨はせぬと白張の袖をまくり上つかみひしがん其勢ひ梅王丸ゑひ笑ひヘーヘハーハヘヽヽハヽヽヽヽーヤアいふな〳〵氣も違はれば此車見ちがへもせぬ時平の大臣齋世親王菅相亟ざん言によつて御沈落其無念骨髓に徹し出合所が百年めと思ひもうけし今日只今櫻丸と此梅王牛に手なれし牛追竹位自慢でくしひ肥た時平殿のしりこぶら二ツ三ツ五六百くらはされば塊忍ならぬ言はれぬ主のかた持顏出しやばつて怪我ひろぐなヤア法に過ぎた案外者アレぶちのめせ引くゝれと供の待聲ごゐに前後左右に追取り卷兄弟は事ともせず取つては投退つかんではぶち付け〳〵投付れば あたりに近付く者もなし(まてろふ〳〵まてろふやい)ヤア命しらずのあばれ者いづれもはおかまひ有な御主人の目通り通奉公は此時節兄弟と一つでない忠義の働きお目にかけんコリヤやい松王が引きかけた此車とめらるゝならとめて見よやいと鼻づら取つて引出す車ホヽウ櫻丸梅王丸爰になくばいざしらず一寸なりとやつて見よヤイ車の内ゆるぐと見へしが現はれ出たる時平の大臣ヤア牛扶持くらふ青蠅めら轅にとまつて邪魔ひろがば轅にかけて敷殺せヤア左いふ大臣を敷殺さんと碎けし轅を銘々提げ大臣を打んとふり上るヤア時平

茶筌酒の段

豊竹駒太夫
竹澤團六

に向ひ推参なりとくはつと睨し眼の光り大千世界の千日月一度に照すが如くにて遠の梅王櫻丸思はず後へたぢ〳〵五体すくんで動かず無念〳〵と計りなり何と我君の御威勢見たか此上に手向ひすると御目通りで一討と刀の柄に手をかくればヤア松王待〳〵雁金巾子の冠を着すれば大君同然大政大臣となつて天下の政を執行ふ時平が眼前血をあへすは社参の穢れ助にくいやつなれ共下郎に似合松王が働き忠義にめんじて助けてくれるハレ命冥伽なうぢ虫めらウ〜アハウ〜アハア〳〵〳〵〳〵アハ〜〜〜と邊をにらんです〜み行ふり返つて松王丸よい兄弟をもつて兩人共に仕合せ者命を拾ふた有がたい忝ないと三拜せよといはれて兩人くはつとせき上ヱ〜おのれにも云分有れ共親人の七十の賀祝儀濟までナフ梅王チ〜其上では松の枝々切折つてかたきの根をたち葉を枯さんチ〜それは此松王も親父の賀を祝ふた後で梅も櫻も落花微ぢん足もとの明い中早く去れ〳〵ヤア推参な歸るをおのれにならはふかとつめ寄〳〵兄弟三人互ひに殘す意趣遺恨にらんで左右へ、別れ行く。

人形

白太夫　吉田榮三
百姓十作　吉田玉市
八重　吉田扇太郎
ばろ吉　吉田文作
千代　吉田小兵吉

（庄本）茶筌酒の段

別れ行く、春さきは在々の鋤鍬迄も樂〳〵と、あそびがちなる一農、一番村では年古き人にしられし四郎九郎、律義一遍とりえにて菅相亟の御領分、佐太に手輕き下屋敷、お庭の掃除承はり松梅櫻御愛樹に土かい水

の養も根が農の鍬仕業我身の老木厭なく幹をこやしの百姓業畑の世話より氣樂なり、堤端の十作が鍬打かたげ門口から四郎九郎殿内にかとはいるを見付コリヤ十作畑へかイヤ今仕廻て戻つたりや嬶がいふには何やらめでたい祝ひじやてて、大きな重箱に眼へはいる樣な餅七つ、朝茶の盞にも喰足れどもらはぬよりも忝ない禮もいひたし祝ひとはマア何でござる、サイノ菅相亟樣のふつて湧た御難儀を下に住おらゝが身、祝ひどころぢやなけれど、せにやならぬさかいで仕るは仕るが世間へも遠慮が有で、彼岸團子程な餅七ツ宛配つたのは此四郎九郎〻丁度七十、この春年頭のお禮に登つた時おらが年をお尋れ、七十と申したりや、古來稀な長生、其上めづらしい三つ子の爺親、禁裏から御扶持下され、悴共は御所の舍人、めでたい〳〵、産れ月、産れ日産れ出た刻限違へず七十の賀を祝へ、其日から名も改てノウ聞かしやれ、伊勢の御師が何ぞの樣に白太夫とお付けなされた、則ちけふが誕生日白黑まんだらかいは掃溜へほつてのけ、けふから白太夫と言ふ程にそふ心得て下され、夫はめでたい序ながら問ましよ、三つ子産と扶持下さる、其謂も聞かしやつたか、サイノ死だ女房が産だ時は邊隣の外聞、ひよんな事じやと思ふたがもつけの幸、三つ子の爺親、一代は作り取の田地三反、日本斗じやないげな、唐迄もそふじやてゝ、男の子なりや御所の牛飼、女良なれば東童さやら是も御所で仕はるゝ、法式は忝ない物且那殿は流罪なれど、おらは所も追い立てられず下された田地は其儘、そちの嬶も若い程に産すならおらにあやかりやと咄の中途、たどりくるは櫻丸が女房八重、けふは舅の祝ひ日とて、風呂敷包片手に提げ、嬉しや爰じやと笠取れば、ホゝ櫻丸が女房八重か、早かつた〳〵外の嫁子も揃ふてくるか、マア上つて抱もときや、アイ〳〵まだ皆樣はお出ないか、遲かろと氣いせいて、淀堤から三十石の飛乘船の足の早いので草臥もせず早來たが仕合せでござんする、コレ四郎九郎殿、お客そふなもふいにまよエゝ四郎九郎とは物覺へがない十作、白太夫じや忘れやつたかいの、イヤ忘れはせぬわいの

餅の祝とは格別、名酒呑ればいつ迄も四郎九郎ハレヤレ盛た酒を飲ぬとは但しはまだ飲足ぬかへゝぬけ〳〵と嘘いふわちよおらに酒いつ盛たチゝさつきに盛た樽や德利は目に立つゆへ餅の上へ茶筌の先て酒盃打てやつたので二度の祝ひ濟だじやないかエゝそれで聞へた、嫗が酒くさい餅じやと言た、外へは遠慮でそふ仕やろとおらは日來懇だけ、晩にきて寢酒一杯お客是にと出て行、嫁ん女アレ聞きやつたか、今の世の人はきめごまかで、おらが始末の手目見付けて、晩にきて寢酒たべふ、ハゝゝアゝせち賢い懇ぶり、イヤ又お前も餘りな聞きも及ばぬ茶筌酒、ホゝゝゝハゝゝと嫁と舅の睦じさ、梅王松王兄弟の女房がくろ道草も、女子の手業笠に摘みこむ蒲公英、嫁菜狗〇の垣根を目印にサア爰ぢやおはる樣、マア先きへイヤお千代さんからと、相嫁同士が門での辭儀合、白太夫おかしがり、一時に產だ三つ子の嫁共先の後の所かい、八重がとふから待て居やる、どちこちなしにはいれ〳〵、ほんに八重樣はやかつたござんする道なれば、はるが所へ誘ふても下さんしよかと、待た程が遲なはつて心せきな道すがら千代樣に行き合ふて連立て來る道てんごう、けふの祝ひのしたしにと嫁菜、蒲公英二人の仕業夫はよふ氣がついた、はる樣誘ふ約束も、日足のたけた氣ぜきして寄る事も忘れたに、お千代樣とはよいお出合、サイナおはる樣に逢たはわしが仕合せ、賑かな道連それはそれぢやが親父樣御料理の拵へ出來て有かへ、イヤ出來てない、わごちよ達にさす合點、こて〳〵とむつかしい事は入らぬ、けさ搗た餅で雜煮仕や、上置きはしれた昆布、隙の入らぬやうに茹て置た、大根も芋もそこにある勝手は知るまい、ヤアえい〳〵と立上れば、イヤ申、けふの祝ひはお前が目當料理方の出來るまで何にも構はず一寢入なされませ、勝手しられど三人寄つて何もかも取り出す、そふじやてゝ立た次手棚なものおろしてやろ、コレ〳〵是見や、祖父の代から傳はつた根來椀じや、折敷も十枚、おらが息災なも此椀折敷堅地なとてかんまへて手荒ふ當るな嫁女達、此マア悴共はなぜ遲い來る一斛と体を横にさし枕堅地

作りの親仁なり、コレ皆様何ぼう、あの様におつしやつても雑煮ばかりでは置かれぬ、飯も焚ざなるまいしなに何はせいでも鰹鱶、道草の嫁菜お汁によかろ、八重様ちよ様頼ます、此はるは飯仕かけふと手んでに翅板摺粉鉢、米かし桶にはかり込み、水入らずの相嫁同士、菜刀取つて切り刻みちよき〳〵〳〵と手品よく、味噌摺る音もにぎはしゝ、白太夫目を覺しコリヤ悴共はまだこぬか、正月から知れて有るおらが祝ひ日、油斷せう筈はないが、アヽ此中誰やらチヽそれ〳〵今いんだ十作が咄しには時平殿の車先きで三人の子供が大喧嘩聞てかとしらしてくれた喧嘩の様子嬢達はしつて居よ、車先きでの事とあれば、時平殿に奉公する松王が女房、爰へきて様子を言やと名指にあふたは千代が迷惑、お祝ひ事の濟まではお前の耳へ入れぬがよいと三人ながら其心、いらぬ事しやべられて隱されれば申します、梅王様櫻丸様二人の相手にこちの人、日頃の短氣言上つて兄弟喧嘩したが氣遣ひなされますな、三人ながら怪我もなく、其場はそれで濟だれ共、もちやくちやいふて居られます、はる様八重様お前方もそふであろ、氣の毒な男の不機嫌、成程〳〵、ちよ様のいはんす通り、けふの祝ひをいゝ立て兄弟御の仲なをし親御のお詞かゝらいではと、男思ひの壁訴訟、エヽわごりよ達に問たらば知れうと思ふた喧嘩の筋知つて居ても言はぬが、同じ胤腹、一時に生れた悴でも心は別々、よふ似た顔を二タ子さいへど、それもそれには極まらぬ、女夫子も有るは又顔の似ぬ子も有る、マア大概顔が似れば心もよく似て、兄弟の中もよいものじやがおらが悴共誰が見ても一作とは思はぬ、生ぬるこい櫻丸が顔付、理屈めいた梅王が人相、見るからどふやら根性の悪そふな松王が面がまへ、ヤ千代が傍で麁相いふた氣にかけてたもんな、マア、怪我もなふて嬉しうおりやる、怪我の次手に孫めは健なか、連て來て顔見せいで、ヤアとかふいふ中もふ七ツじやおれが生れたは申の刻限料理も大かた出來たであろ、嫁達膳を出さぬかい、アイ〳〵〳〵刻限の過る迄連合衆はなぜ見へぬ、千代様八重様、道までいて見てこまいか、爰で待つと

より三人ながらござんせいかふ、マア嫗達何言ふぞい、子供共は來て居るはい。アノ來てぢやとは、どこに〳〵、エゝどんな嫁共、そこに居るを得しらぬかい、コレ三本のあの木が子供等、梅王松王櫻丸、顔は殘らず揃ふて有れ、勿体ない菅相亟樣くゝめるやうにいはしやました、生れ日の刻限が違や悪い、祝儀にはかげの膳もすへるならひ、サア〳〵早ふと白太夫が、いふに猶豫もなりがたく俄に盛るやら箸打つやら、椀の向ふの小皿にごまめ、まづ一番に親父樣、是でおすはりなされませと、給仕は元よりならはれど見馴聞馴、擧動ひ、八重が配膳、御所めけり、イヤおれもあそこへいこイヤ土間では冷が上ります、やつぱり爰でと押備へ、是から面々夫の給仕膳を捧げて庭におり、此梅の木が梅王殿枝ぶりずんと日頃の氣質、八重が連添ふ男ぶり、木ぶりも吉野の櫻丸、是は千代まで添ひ遂る女夫が中の若緑り色も艷々勢ひよい、松王殿で子達も揃ふ、サア親父樣目出たふお箸なされませ、ホゝなされふ共〳〵親がいに座が高い、子供共へドレ挨拶、ハテもふそれには及びませぬ、お加減のさめぬ内イヤ〳〵お春そでおじやらぬ、親でも子でも極つた辭誼作法と庭におりるもまめやかに樹の前に畏まりイヤ是子供衆、何にもござらず共よふまいつて下されい、親が折角おりての辭誼、辭誼返しがしたふてもいごかれぬはしれて有る爰で〳〵ハゝゝゝ嫗達餅を替やいのと尻もちついて悅ひ笑ひ、我膳に押直り、箸を取るよりムウ〳〵扨鹽梅じや味し〳〵、三人の嫁女達給仕も片いきせぬ樣に、三ばいは喰合點で、おじやらしまするじやなんよへハゝゝゝこりや新しい三方土器誰が持て來ましたぞ、イヤそれは八重樣の、ハテ氣が付て添けない、春も何ぞくれるかい、ほんに忘れておりましたと、扇三本袖土産中の繪は梅松櫻お子達のかづを祝ふて三本ながら末廣がり目出度ふ祝ふて上まする、こりやめでたい添い、中の繪も咄しで知れた、明けて見るに及ばぬ此儘〳〵戴きまするこ機嫌に千代が祝から是は切の有合いでわたしが縫た手筒頭巾、つむりにあはずば縫直さふ、お召しなされて下さんせ、チゝどれも〳〵不

喧嘩の段

竹本文字太夫
野澤勝平

足もない心付きなくりやり物、サア盃も濟だは、おれが膳から上てたも、子供等が膳は盛たまゝ、冷たで有らふ盛直してコレ嬶達二人前づゝ喰てたもや、イヱ〳〵私等はまそつと待て、主達が見へてから打並んで祝ひましよ、そんならそれよ、おれは村の氏神樣へ參つて來ませふ、そんならお參りなされませ、チヽ〳〵往きませよ、拵へて置た十二銅そこに有る取てたも、三本の此扇、末廣ふに子供の生先氏神へ賴んだり見せたりせう、ヤア八重はまだ參るまい次手ながら連立ふ、サア〳〵こちへと機嫌よふ表を、

人形

松王丸　吉田玉松
梅王丸　吉田玉幸
千代　吉田小兵吉
はる　吉田文作

（床本）喧嘩の段

さして出て行く、コレ千代樣、年寄しやつてもものの覺へがよい事こなたさんや此春は氏神樣しつて居る、八重樣は今が始め、いはしやんすりや其通り、物覺へのよい親御に違ひ、物忘れする子供達、松王殿なぜ遲いぞ、こちの夫もなぜ見へぬ、但しはこぬ氣か、けふ見へいでよいものかいな、それそこへ松王殿マ是女房を立つそに立たして刻限過ぎたを知らずかい、ヤアべり〳〵さかましい時平樣の御用有て夫仕廻ればいごかれぬ、先へ參つて其譯いへと言付たを忘れたか、梅王も櫻丸もまだこぬそふな、親仁殿も内にござらぬ、サア其親父樣は八重樣を同道で、もち

つとさきに氏神參り兄弟衆はまだ見へぬソレ見いな、遲いといふおれは主持ち、梅王も櫻丸も主なしの扶持放され、用もないわろ達が遲いのが、ほんの遲いの、お春殿そじやないかと詞の端にも殘る意趣、梅王も日脚はたけるせいて來かゝりつゝかう、松王には顏ふり背け、お千代殿けふは太儀コリヤ女共親人と櫻丸、八重も爰にはなぜ居やらぬ、イヤ今も松王樣のお尋ね、櫻丸樣はまだ見へぬお二人は宮參り、ムゝ櫻丸はどふしてこぬな、ア待兼る者はこいで、胸の悪い見どむない頬がまへと、梅王に當こすられ松王丸逸徹短慮あたぶの悪いれすり言、いひ分有らば直にいやれさ、何のわれに違慮せう、わが頬がまへを見る度々ゲイ〳〵と虫唾が出る、ハ〜〜〜ハレ申したり腹の皮此松王は生れ付て涙もろい、櫻丸くつちが樣に、扶持放されの痩願い、ひだるからふと思ふてやるが兄弟のよしみ丈お〜扶持放されと笑ふやつが喰ふ扶持がろくな扶持か鐵丸を食すといへ共心穢れたる人の物を請けずといへ八幡大菩薩の御記宣、心汚れた時平が扶持有がたふ思はな、人でなしの猫畜生ヤア畜生とは舌長な梅王、今一言いふて見よおい、望みなら安い事畜生〳〵どふ畜生、もふ赦されぬと松王丸刀の柄に手をかくれば松王も反打かへし詰寄つめよる二人の女房、是はマアおさましい氣が違ふたか梅王殿と千代が夫を抱止むれば七十の賀を祝ひに來て親父樣に逢もせず反打てどふさしやる、祝ひ日に拔てよいかこちの人梅王殿と刀の柄にしがみ付く女房春を取て突き退け、七十の賀でも祝ひ日でも堪へ袋のやぶれかぶれ、留立して怪我するな、コリヤ松王後れたな、女房が留るを幸に頼げたに似ぬ腕なしめチ〜留らるゝを幸ひとは、我心に引きくらべて松王には慮外の雜言身が女房が留たよりそちが女房が親にもまだとの一言、肝先へきつと當りこらへ〳〵こらへたがもふたまらぬ、眞劍の勝負は親人に逢ての後それまでの腹いせに砂かぶらせれば堪忍ならぬ、千代に是を預けると兩腰拔てほうり出し裾引からげて身拵へお〜畜生めがこりやよい了簡、櫻丸が來るまでは松王が命松王に預けると同じく兩腰ほうり捨て、刄物を渡

櫻丸切腹の段

切　竹本土佐太夫
　　野澤吉兵衛

人形

白太夫　吉田榮三
松王丸　吉田玉松
梅王丸　吉田玉幸
櫻丸　桐竹紋十郎
千代　吉田小兵吉
はる　吉田文作
八重　吉田扇太郎

せば血はあやさぬ、女房共邪魔するなと、すつと寄て縁より下へ踏落せばさそくの松王落ちさまに諸足かけば梅王丸眞逆樣に落重り、掴み合い擲き合い、組んでは放れ離れては又組合い捻じ付け引ふせ蹴つ踏づ、双方力も同年、血氣盛りの根くらべ千代と春とは二人の兩腰、取れもせうかと氣遣ひ半分傍へも寄れず、ハア〳〵〳〵と心をあせり、氣をもみ上げどちらが勝も負もせず擲き合たが二人の存分〻梅王殿もふよいわいな松王殿もふおかしやんせ、止て〳〵といふをも聞かず、勝負、つかではむざ働き投げてくれんと松王丸かさにかゝつて押す力、ひるまぬ梅王つゝかへる、肩先ひれつてかつくりさせ横に抱へる松の木腕、劣らぬ肘骨梅の木腕、からみもぢつて、押合ふ力、双方一度にこけかゝり、もたるゝ拍子櫻の立木、土際四五寸殘る木の上はほつきりぐはつさりと折たに驚く相嫁同士、二人が勝負も破角力俱にあきれて手を打掛ひうろつく中へ早下向、アレ親父樣のお歸りしや白太夫樣のといふ聲に二人は肩入れ裾おろし腰刀指す間も、

（床本）　櫻丸切腹の段

有らず戻られし年は寄てもこはいは親、上へも上らず大蹲踞けふの御祝儀お目出度いと、祝儀は述ても赤面し塵をひれらぬばかりなり、親はほや〳〵機嫌顔、嬢達が先へ來て七十の賀を祝ふてくれたで、けふの祝ひはさらりとしもた。しれて有る刻限

遲いは何ぞ障りが有つてこぬに極めた、梅王松王よふこそ〳〵來てくれた、コレ二嫁女煮くちたで有ふが雜煮祝はしてたもつたかと折た櫻は見ながらも誰が仕わざぞと咎めもせず呵るところを呵らぬ親、一物ありと知られたり、梅王丸懷中より用意の一通取出し祝儀濟で候へば私の所存の願ひ是に書付け候と親の前に差出せば松王も又一通身の上の願ひ是にありと同じ所へ直せしはいひ合はせたる如くなり、白太夫打笑ひ心安い親子兄弟夫婦斯並んだ中願ひ有らば口でいはいでぎつとした此書付けさらばおらもぎつとして代官所の格で捌こと願ひ書手に取り上げ、つぶ〳〵讀も口の中、願ひは何やら聞へねど春と千代とは夫の心知つて居る筈後先きをしらねば案じる八重一人三人の兄弟鬪爭親父樣お頼み申し、けふ中直しと言ひ合はした千代樣春樣こりや何ぞい、何をいふてもこちの人櫻丸殿ござらぬゆへ、心當が皆違ふた道で眦畢がぜこたつかと見へぬ男を案じるやら二人の願ひも氣にかゝり小首傾け案じ居る、親父は二通讀仕まい、コリヤ梅王そちが願ひに旅へ立蹤くれとは、ム〵推量するに外でも有るまい菅相亟のござる島か成程〳〵、結構な御殿に引きかへ垣生の小生の御住居、御用聞く人なければ梅王下つて御奉公仕らん、身のお暇を申ける、ム〵恩を知られば人面獸心といふてな、顏は人でも心は畜生、島へ參つて御奉公がしたいとは、まんざら恩を辨へぬ畜生氣は離れた心、コリヤやい御臺樣や、若君樣おかはりも遊ばされず、ござる所も知れた上旅立の願ひじやな、イヤ御臺樣は其以來お目にもかゝらず御座所も存じませぬ、併し女儀の御事なれば若君樣とは又格別、菅秀才の御事は慥にといはんとせしか松王を尻目にかけ、慥に所は存ぜれ共息災に御座有る噂さ、ヤイ馬鹿者、大切な菅秀才樣息災なを聞たばかりお目にもかゝらず有家もしらず、それで儕忠義が濟か、女儀の身とぬかしおる御臺樣は主じやないか、コリヤやい尤御不自由な配所の御住居お傍へ參つて御用を聞く膝行役の奉公は此白太夫がよい役ぢやはて、血氣盛り奉公盛り、菅相亟の所緣と有れば根堀り葉堀り絕さんとて鵜の目

鷹の目、油斷ならぬ讒者の所爲すはと言ふ時、身を惜まず御用に立所存はなふて、膝行役願ふは命が惜いか敵がこはいか、旅立ちの願ひ叶はぬ〳〵取上げぬと願書顔へ打付けてはつたと睨む老の腹立、道理至極に梅王夫婦、誤り入つたる風情なり、ヤイ松王そちが願ひを見れば勘當を請けにいとなハアハ〜〜〜神武天皇樣以來珍らしい願ひじやなエ〜不孝者といはゞ譬のないやつ。餘り珍しい願ひなれば聞届けてくれるぞと親の了簡、ハ〜ハア 忝しと悅ぶ松王勇み立ち親子兄弟の緣を切る所存も問はず赦されしは此松王が主人へ忠義推量有つての事なるべし、ハ〜〜〜〜いかさま口は調法なものぢやな、主人への道立て臍がくれるわい、道も道に寄つてはな横に取つて行く道を蟹忠義と言はいやい、甲に似せて穴を掘ると、勘當うければ兄弟の緣も離れ時平殿へ敵對ば切つても捨ん所存よな、尤善惡差別なく主へ義は立つにもせい親の心に背くをな、天道に背くといふわい、望み叶へてさらする上は、人外め早歸れ、隙取ば親子の別れ竹箒くらはさふと筋骨立て怒り聲、松王は思ひのまゝ女房こいと引立行く、千代は遺に親兄弟名殘も惜き相嫁の顔を見るめもあかれぬ涙、袂絞つて出て行く、ハ〜ヤレ嬉しや面倒なやつ片付たヤイそこな馬鹿者、御臺若君の御行衛、尋にいかぬか、うせぬかと是も手づよふきめ付けられそんなら嶋へはサア行所へはおれが行くわい、出て行〳〵をこばがるおはる、八重樣あとで能いやうにお詫言をと言捨て夫婦は門へ白太夫は唾を呑込んで奥へ行く、兄弟夫婦に引別れ取殘されし八重が身の仕廻もつかぬ物思ひ門へ立そに待つ夫思ひかけなき紋戸口刀片手に莞爾と笑ひ女房共嘲待つらんと、聲に悔り走り寄り、ヤアいつの間にやら來た共言はず家じる女房を思はぬ仕方、兄弟衆の事に付て親父樣のお腹立、其場へは出もせいでマアなんでこな樣は納戸の内に、エ〜これナア譯を聞かして〳〵と聞たがるこそ道理なれ、暫く有て白太夫挾出し鍔の小脇差、三方に乘せしほ〳〵と出るも老の足弱車、舍人櫻が前に置き用意よくばとく〳〵といふに女房又悔りヤアこりや何じや親父樣櫻

丸殿どふぞいなア、何で死ぬのぢや腹切るのじや切られねばならぬ譯ならば未練な根性さぎやしませぬ、こなさんが言はれずば親父樣の只一言案じる胸を休めてたべお慈悲〳〵と手合せ泣より外の事ぞなきャア親人に何御苦勞、是まで馴染夫婦の中、所存殘さず言ひ聞かさん某が主人と申すも恐れ多き齋世の君樣、百姓の伜なれ共菅相亟樣の御不便を加へられ親人へは御扶持方、御愛樹の松梅櫻、兄弟が名に象り松王、梅王、櫻丸、憚り有や冥加なや鳥帽子子になし下され御恩は上なき築地の勤め、三人の其中に櫻丸が身の幸、人間の胤ならぬ竹の園の御所奉公、下々の下たる牛飼舍人、勿体なくも身近く召され、菅相亟の姫君とわりなき中の御文使ひ、仕課せたが仇となつて讒者の舌に御身の浮名終には謀叛と言ひ立られ、菅原の御家沒落是非もなき次第なれば宮姫君の御安堵を見屆け義心を現はす我生害けさ早々爰でま來て右の段々生て居られぬ最期の願ひ、き〻屆けて切腹刀、親の手づから下されたはい、女房共我等にかはつてお禮も申し死後の孝行賴むぞと義を立守る夫の詞女房わつと聲を上げ仇なる戀路のお媒介○○樣の御惡名相亟樣の流され賜ふ其言譯に切る腹なら此八重も生ては居られぬ私は殘つて孝行せいと胴慾にもよふいはれた、それよりはまたむごいころ無理な事いふ手間でいつしよに死とコレ申し女房の願ひ立てたべ、親父樣の思案はないか、コレ俯いてばかり〳〵御座らず共よい智恵出して下さりませ、夫の命生死は親父樣のお詞次第、お前は悲しうござりませぬか、親の手づから此三方腹切刀は何事ぞと恨つ賴つ身を投げ伏もだへこがる〻有樣はものぐるはしき風情なり、白太夫顏ふり上げ子に死といふ腹切刀、むごい親と思ふいひ譯ではなけれどな、此曉は我身の祝ひ、いつもより早く起門の戸明れば櫻丸ヤレ早ふ來てくれた陸なれば夜通し、但しは船かサアまあこちへと呼入れて樣子を聞けば右の次第、白太夫づれが伜には驚き入た健氣者と

ゞめても聞入れずけふの祝儀仕まふまで、女房が來ても逢はせぬぞ、おれが出ひと言ふまでは納戸の内に隱れて居いと一寸延した命をかばひ助けてよいか悪いかはおらが了簡に及ばず神明の加護に任さんと最前祝儀にくれた扇三本幸繪には梅松櫻子供の行末祈る顔で氏神の祠へ直し置信を取て御圖の立願櫻丸が命乞、中の繪は上から見へぬ三本の此扇、初手に櫻をさらしてたべェ〜上らせ賜へと再拜行念、取上げた扇ひらけば梅の花、南無三是は叶はぬ告か神の心を疑ふ御圖の取直しせぬものなれ共助けたいが一つばいで取直す次の扇、今度も違ふて又松の繪頼みも力も落果て下向すりや折た櫻、定業と諦めて腹切刀渡す親、思ひ切ておりや泣かぬ、そなたもなきやんなヤ、ヤ、ヤ、〜〜〜〜アレ聞たか女房共、櫻丸が命惜まれて、老人の心づかひ御恩も送らず先達不孝御赦されて下されい下郎ながら恥をしり、義の爲に相果ると三方取て戴くにそもふコレ今が別れかと泣も泣れぬ夫の覺悟、白太夫目をしばたゝき潔い伜が切腹、介錯は親がする、其刀コレ見やれ、と懐から取出すは頃ひ込だる鉦撞木、コレ此刀で介錯すれば未來永劫迷はぬ功力利鈎即是彌陀號と撞木を取て打鳴らす鉦もしとろに南無阿彌陀〳〵南無あみだ〳〵南無阿彌陀〳〵〳〵念佛の聲と諸共に襟押くつろげ九寸五分弓手の脇へ突立れば八重が泣く聲打つ鉦も拍子亂れて南無あみだ〳〵〳〵〳〵右のあばらへ引廻し憚ながら御介錯ヲ〜介錯と後ろへまはり撞木振り上げ南無阿彌陀佛と打や此世の別れの念佛、九寸五分取直し、喉のくさりを刎切つてかつばと伏て息絶たり、八重が覺悟も此場をさらず夫の血刀取上る枳殻のかげより梅王夫婦はしり寄てこれや何事と九寸五分もぎ取り捨、親の前に畏りコレ〳〵

先程歸れと有りし時表へは出たれど櫻丸がこぬ不思議と、相亟樣の御秘藏有し櫻の折たも詮議もなされぬ、彼是不審に存ずるから裏より忍び立戻り始終の樣子は承はつた、是非に及ばぬあの樹と倶に枯し命の櫻丸、兄弟の最期餘所に思て親人の鉦皷にあはせ、女夫の者が忍びの念佛あつたら若者殺せしと悔む夫婦も聞く親も八重も死なれぬ身のくり言是非も涙に南無阿彌陀佛と鉦打ち納め撞木とかはる杖と笠、白太夫は片時も早く菅相亟の御後墓ひ嶋へ赴く現世の旅立ち、櫻丸が魂魄は未來へ旅立、此亡骸櫻王夫婦を賴むぞと、八重が事までつど〳〵に賴む詞の置き土産、冥途のみやげは只念佛、南無阿彌陀佛〳〵〳〵南無阿彌陀佛〳〵〳〵なむあみだ笠打ちかぶり西へ行足十萬億土亡骸送る親送る生ての忠義死したる義心、一樹は枯れし無常の櫻、殘る二樹は松王梅王三つ子の親が住所末世にそれと白太夫、佐太の社の蔕跡も神の惠としられける。

脊山の段

大判事　竹本津太夫
　　鶴澤綱造

久我之助　豊竹つばめ太夫
　　豊澤仙糸

妹山の段

定高　豊竹古靱太夫
　　鶴澤友次郎
　　琴（鶴澤福太郎
　　鶴澤友蔵）

雛鳥　竹本南部太夫
　　野澤吉彌

妹脊山婦女庭訓

山の段

正本名題『十三鐘絹懸柳妹脊山婦女庭訓』は明和八年正月に書卸されたもので作者は近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南で三好松洛が後見となってゐます。全五段から成立つてゐますがこんどの『山の段』は恰度三段目の切でありまして、書卸當時は染太夫と春太夫が語り、人形の方は大判事を吉田才治、後室定高を田中小八久我之助を井原眞吾、娘雛鳥を吉田島八が遣てをります。この淨瑠璃は王朝物の代表的傑作で、結構の雄大趣向の奇妙、章句の優艷な點に於ては淨曲中隨一であります。この『山の段』の內容はと申ますと……王朝時代の入鹿の暴政を背景にしたもので、武士の意地づくから、紀州脊山の領主大判事清澄と、大和妹山の領主太宰の少貳國人の後室定高とが國境の吉野川を境にして互に反目して軋轢をつゞけてゐたが、清澄の忰久我之助は何時しか國人の遺子の雛鳥と相思相愛の仲となつてゐました。處で當時國政を自由にしてゐた蘇我の入鹿は其權勢を恃んで雛鳥を後宮に迎へよふとし、其手段として久我之助に難題を言ひかけて自滅させると、雛鳥も入內を拒んで、久我之助に操を立てゝ母の手にかゝつて奮の花を散らすといふ筋で、淨瑠璃は元より歌舞伎でも兩床を使つて掛合ひで演じることになつてゐます。舞臺

人形

久我之助　桐竹政龜
娘雛鳥　桐竹紋十郎
腰元小菊　桐竹紋太郎
腰元桔梗　吉田光之助
大判事清澄　吉田榮三
後室定高　吉田文五郎

は脊山、妹山に櫻の滿開を見せその峽を吉の川の清流が春霞に和して流れてゐる壯大な景で川を隔てゝ可憐な戀が芽生え、落花のやうに青春が散つてゆくといふ繪と詩に包まれた暢びやかな雅趣のある狂言であります。

親達の心も解け合ひ雛鳥の首が形見の爪琴に乘せられて吉野川の川瀨を渡つて久我之助の許へ輿入れするところなど箇有藝術の獨壇上で優粹の絶品でありませう。

(床本)　山の段

往古の、神代の昔山後の、國は都の始めにて、妹脊の始め山々の、中を流るゝ吉野川、塵も芥も花の山げに世に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨所、妹山は、太宰の少貳國人の領地にて、川へ見越しの下館、脊山の方は大判事清澄の領内。子息清船日外より爰に勘氣の山住居、伴ふ物は巢立鳥、彼と我と只二つ、經讀む鳥の音も、澄みて、心細くも哀れなり。頃は彌生の初つ方、此方の亭には雛鳥の、氣を慰めの雛祭り、桃の節句の供奉、萩の强飯侍女の、小菊、桔梗が配膳の、腰もすうはり春風に、柳の楊杖近端く、　詞　嘯小菊、平常のお雛は、御殿でお祭りなさるれど、姫樣のおしつらひで、此山崖の假座敷谷川を見晴し、櫻の見飽き、雛樣も一入お氣が晴れて可からうの、此方も追付け好い殿御をもつたら、常住あの樣に引付いてゐたら嬉しかろ。つら桔梗の何いやるやら、何程女夫

並んでゐても、あの樣に行儀に畏つて斗りゐて、手を握る事さへならぬ窮屈な契は厭や、肝心の寢る時は、離れ〳〵の箱の中、思のたえる間はあるまいと。仇口にも雛鳥の、胸にあたりの人目堰く、辛い戀路の其中に、親と親とは昔より、御中不和の間となり、逢ふ事さへも片絲の、結ぼれ解けぬ我思ひ、戀し床しい清船樣、此山の彼方にて、聞いたを便り母樣へ、お願ひ申して此假屋、お顏が見たさの出養生、爰迄は來たれども、山と山とが領分の、境の川に隙てられ、物言ひ交はす事さへも、ならぬ我身の儘ならぬ、今は却ゝ思ひの種、いつそ隔てゝ戀ひ侘びる、逢れぬ昔が勝しぞかしと、切なる思ひ搔くどき、歎ば俱に侍女共、お道理でござります。ほんにひよんな情事で、隣同志の紀の國大和、御領分の競合で、詞お二人の親御樣は摺れ摺れ、雛鳥樣と久我之助樣の妹脊の中を引分くる、妹山脊山船も、筏も御法度で、唯だ此川一つ、ついわたられさうなもの、小菊瀨踏して見やらぬかチゝ滅柏な、此谷川の逆落し、紀州浦へ一さきに、流れて往たら鮫の餌食。したが申し雛鳥樣お前の病氣をお案じなされ、此假屋の出養生さしなすつたは、餘所乍ら久我樣にお前を逢はす後宝樣の粹なお捌き、女夫にして下さりませと、直にお願ひ遊ばしたら、よもや厭とは岩橋の、渡る事こそならずとも、却て遠目にお姿をと、障子ぐわらりと椽端に、覗き溢るゝ腰元共、久我之助はうつつと、父の行末、身の上を、守らせ給へと心中に、念彼觀音の經机、案じ入つたる顏形、手にとるやうに、噛あれ〳〵、詞机に凭れて久我樣の物思はしいお顏持、お癖が起りつらん。詞エゝお傍へ行き度い、コレ爰にゐるわいなと。いへど招けど谷川の、漲る音に紛れてや、聞えぬ辛さ詞エゝ辛氣、此方が思ふやうにもない、コレこつちや向いて見たが可いと焦燥るお傍に氣の付に詞ほんに夫よ、口ではいはれぬ心の丈、像て認め奥山の、鹿の卷筆封じ文、戀し小石に縛りそへ、女の念の通ぜよと祈願を籠めてうつ礫、からりと川に落ち瀧津、波にせかれて流れ行く。詞エゝどんな心の念は届いても、女の力の届かれば、思ふた計り片便り

返事を松浦佐用姫の、石になりともなりたいと、ひれふす山の効もなき久我之助川に目を着け詞何處よりか水中に、打つたる石は重けれど、逆捲く水の勢に、沈みもやらず流るゝは、ムゝ重き君も、入鹿といふ逆臣の、水の勢には敵對難き時世の習。夫を知つて暫しの中、敵に從ふ父大伴事殿の心。善か悪かを三ツ柏、水に沈めば顧叶はず、浮む時は顧成就吉野を假の御祓川、大神宮へ朝拜せんと、柏の若葉摘取つて、谷を傳ひに水の面、見遣る女中が、申し〳〵詞いまの小石が届いたか、久我様が川へ下なさるゝ、あの岩角の折曲りが、川巾がいつち狭い、幸の好い逢瀬と、いふに嬉しさ雛鳥の、飛立つ許り振袖も、裾もほら〳〵坂道を、折柄風に散る花の、櫻が中の立姿しどけ、難處も厭ひなく、喃う久我様が懐かしやと、いふに思はず清船も雛鳥無事でと顔と顔。見合す計り遠き間の、心計りが抱合ひ、詮方涙先だてり、詞申し清船様、わしやお前に逢たさに、病氣と云立て爰迄は來てゐれど、親の許さぬ中垣に、忍んで通ふ事叶はず、女雛男雛も年に一度は七夕の、逢瀬はあるに此やうに、お顔見ながら添ふ事の、ならぬは何の報ぞや、妹脊の山の中を隔つる、吉野の川に鵲の、橋はないかと口説言聞く清船も、楫あらば早渡りたき床しさを、胸に包みて、詞道理〳〵我も心は飛立てど、此川の法度嚴しきは親〳〵の不和計りでなく、今入鹿世をとつて、君臣上下心々〳〵、隣國近邊を離も、親みあらば徒黨の企てあらんかと、互に通路を聲めて、船を泊たる此川は、領分を分ける關所も同然、命だにあるならば、又逢ふ事もあるべきぞ、今流したる水の柏、波に揉れて浮みしは心の願ひ叶ふ報せ、入鹿が掟嚴しければ、我も世上を憚りて、此山奥の隱れ住、心の儘に鬱の、聲は聞けども籠鳥の、雲井を慕ふ身の上を、思ひ遣られよ雛鳥と、儘ならぬ世を怨み泣、詞喃又遇ふ事もあらうとは、別るゝ時の捨詞、假令未來の父様に、御勘當受けるとも、わしやお前の女房ぢや、迚も叶はぬ浮世なら、法度を破つて此川の、早瀬の波も厭ふまじ、何處如何なる方へなと、連れて退いて下さんせ、詞私は其處へ行ますと、既

に飛込む川岸に、慌て驚き留むる侍女、イヤ〳〵放しやと泣入る娘、詞ヤレ短慮なり雛鳥、山川の此早瀬、水練を得たる者だに渡り難き此難所愈ち命を失ふのみか、母後室に歎きを懸け、我にも愈々憎悪が懸る科を重れる道理、必ず逸り召れなと、制する詞一筋に、思ひ詰めたる女氣も今更弱る折こそあれ、詞大判事清澄様御入なり〳〵と報ずる聲、はつと驚き久我之助、歸るを名殘、押留むるも、我身を我身の儘ならず、コレ喃待ての聲計り、後室様お出と、告ぐる下部に詮方も、泣く〳〵庵のうち悄れ、登る坂さへ別路は、力難所をゆく心地、空に知れぬ花雲り、花を歩めど武士の、心の嶮岨刀して削るが如き物思ひ、思ひ逢瀬の中を裂く、川邊傳ひに大判事清澄、此方の岸より太宰の後室、さだかに夫と道分の、石と意地とを向ひ合ふ川を隔てゝ大判事様お役目御苦勞に存じますと聲襠をかい取の夫の魂放さぬ式禮、清澄も一揖し早かりし定高殿御前を下がるも一時、參る所も一つなれ共此春山は身が領分、妹山は其元の御支配、川向ひの喧嘩さやら睨み合て日を送る此年月、心解るか解ぬかはけふの役目の落去次第、二つ一つの勅命、狼狽た捌き召さるなと、呢くしやつく茨道、脇へかはして仰の通り、入鹿様の御諚意はお互に子供の身の上受合ては歸りながら、身腹分けても心は別々、もしあつと申さぬ時は、マアお前にはどふせふと思し召、知れた事御前で承はつた通り、首打ち放すぶんの事さ、不所存な伜はあつて益なくなふて事かけず、身の中の腐りはそいで捨るが後の養生、ひつきよう親の子のと名をつくるは人間の私、天地から見るときは同じ世界に涌た虫、別に不便とは存じ申さぬ、ハテきつい思ひ切、私は又いかふ了簡が違ひます、女子の未練な心からは我子が可愛てなりませぬ、そのかはりにおまへの御子息様の事は眞實何共存じませぬ只大切なはこちの娘、添い入鹿様のお聲のかゝつた身の幸い、譬どふ申さふ共母がすゝめて入内させおきさき様と多くの人に敬まひ侍づかさふと思へば此様な嬉しい事はござりませぬホゝゝゝと空笑ひムゝシテ又得心せぬ時は、ハテそりやもふ是非

に及ばぬ枝ぶり悪い櫻木は切て繼木を致されば太宰の家が立ませぬチヽそふなくては叶ふまい此方のせがれとても得心すれば身の出世榮花を咲す此一枝川へ流すが知らせの返答盛ながらに流るゝは吉左右、花を散して枝ばかり流るゝならば、せがれが絕命と思ほれよ、いかにも此方も此一枝娘の命、生花を散さぬやうに致しませふ、チヽサ今一時が互の瀨ごし此國境ひは生死の境返答の善惡に寄せて遺恨に遺恨を重るかサアこれまでの意趣を流して、中吉野川と落合ふかまづそれまでは双方の領分お捌きを待つておりますと、詞峙つ親と親、山と大和路分れてもかはらぬ紀の路恩愛の胸は霞に埋もれし庵りの内に別れ入る、立派にいひは放しても定かに知らぬ子の心、覺束なくも呼子鳥、娘々と谷の戸に音なふ初音雛鳥も母の機嫌をさし足に、かゝ樣よふぞ今日はお目出たふ存じますと、武家の行儀の三ツ指にかたい程猶親子のしたしみ、チヽよふ飾りが出來ましたけふはそなたの顏持もよさそふで、一しほめでたい、母も祝ふて献上のこの花、備へてたも、いくつになつても雛祭りは嬉しいもの、女子共何なりと娘が氣に合ふ遊びをして隨分といさめてくれといつに勝れし後室の機嫌は訴訟のよい出汐、今のをちやつと乘出して御ちふじませと腰元に腰押されてさやかうといひそゝくれのもつれ髪、イヤのふ雛鳥脊だけ延た娘を親の傍に引付ておけば結局病ひの種、それで急に思案を極めてそなたによい殿御を持たす、嫁入さすが嬉しいかエヽハテ氣遣ひ仕やんな、可愛娘の一生を任す夫、そなたの氣に入らぬ男を何の母が持さうぞ、ナア腰元ども、ハイ〳〵左樣でござります、お氣の通つた後室樣、嫁入のさきは大かた今のあこがるゝ君でござりませふと押推當ども得手勝手、誰にか緣を組紐に胸は眞紅のふさがる箱取出し妹脊をならぶる雛の日は嫁入の吉日、此箱の主は極る殿御、雛の御前でつまさだめ、コレそなたの夫といふは誰あらふ、入鹿大臣樣じやはいの、エヽそんならわたしを嫁入さすさはチヽ太宰の小貳が娘雛鳥、美人の聞へ高いぶんに達し入内させよと有難い勅諚、エヽイはつと悔りうろ〳〵と

詞は涙ぐむばかり、チヽ肝が潰れるはづ、おつとゝ申すもおそれ多い×
×の君を聟に取り家の面目、日本國に此上のない嫁入の隨一果報な娘、此樣なめでたい事があるものかナア女子共ハイ〳〵お目出度いと申そうかいつそ亂騒ぎでござりますと工合違の嫁入に菊も桔梗もなげ首の二人は小腹立て行く母の心も色々に咲分けの枝差出し親のゆるさぬ言いかはし徒づらは呵って返らず一旦思ひ初めた男いつまでも立通ふすが女の操破りやとはいはぬが貞女の立てやうが有りそふな物、さつくりとよふ思案しや、此花は八重一重互に不和なる親々の心揃はぬ二つの花、一つ枝に取結び切放すに離されぬ、悪縁の仇花、今そなたの心次第で當時入鹿大臣の深山風しに吹ちらされ久我之助は腹を切られぬならぬぞや、雛鳥と縁を切て入鹿樣へ降參すれば清船も命は助かる、しらせは川へ流す櫻ちるか散らぬか身の納り時に從ふ風になびき君が手活の花になれば八重も一重も恙なふ九重の内に侍づかるゝ互の幸ひ、戀しと思ふ久我之助たすけふと殺さふと今の返事のたつた一つ、貞女の立樣サア〳〵見たいと戀も情けも辨まへて義理の柵みせきとめても涙せき上げ〳〵ながら母樣段々聞きわけましたお詞は脊きませぬ、そんなら得心して入内してたもるかアイ〳〵チヽ嬉しや出かしやつた〳〵それでこそ貞女なれ馴ぬ雲井の宮仕へ武家の娘と笑はれな、けふより内裏卜齋の髪も吹めすべらかし祝ふて母が結直してやりましよといそ〳〵立は立ちながら娘の心思ひやり別れの櫛の齒かなさも解ほどかれぬ浮思ひ、重き脊山の庵りの内父が前に謹んで久我之助が心底聞し召し分けられ切腹御赦免くださるゝ事身に取ていかばかり大慶至極と手を突けば默然たる大判事やゝうちうるむ目を開き今朝入鹿大臣此大判事を召し出し先君寵愛の采女、身を投死したりとは偽はり其方がせがれ久我之助人知ぬ方へ落しやりしに極まれば必定汝らが方にかくまひあるべしこの難題もとより知らぬ大判事よく〳〵思へば采女の御難をさけん爲猿澤の池に入水のていにもてなしてひそかに落しまゐらせしは中〳〵久我之助が智慮でない、鎌足公の差圖を受

けてのはからひを知つたは身もけふが始め親にも隱し包みしは大事を洩さぬ心の金打若輩者には神妙の仕方ハア出かしたりと思ふにつけ、邪智深き入鹿久我之助が降參せば命を助けん、つれ來れと情けの詞は釣寄せて拷問にかけんばかりごと、責殺さるゝ苦しみより切腹さすれば采女の詮議の根をたつ大功、天下の主の御爲にはなにせがれの一人等萍に生ゆる草一本引ぬくよりも些細な事と涙一滴こぼさぬは武士の表、子の可愛ない者がおよそ生ある者にあらふか餘り健氣な子に恥て親が介錯してくれる、侍の綺麗を飾りいかめしく横たへし大小、せがれが首を切る刀とは五十年來しらざりしと老の悔みに清船も親の慈悲心ありがた涙、命二つあるならば君には死して忠義を立、父には生て養育の御恩を送り申さんに今生の殘念是一つと顏を見上見下るしてわつとひれ伏親子の誠、こなたの亭には母後室サア〳〵目出度いそなたの名の雛鳥を其まゝの内裏雛、裝束のつけやふも此女雛と見合せてサア〳〵早ふとありければ恨めしげに打守り、女夫一對いつまでも添とげるこそ雛の德、思ふお人に引はなされ何樂しみの女御きさき、茨の絹の十二一重、雛の姿も恨めしと取て打つけ椽板にころりと落し女雛の首、驚く母の胸板に必死と極る娘の命つゝめどせきくるはら〳〵涙娘入内さすといふたは偽はり、まつこの樣に首切つて渡すのじやわいのふ、エゝそんならほん〳〵に貞女を立さして下さりますかアゝ添いありがたいと伏拜む手を取てノウ入内せずに死ぬるのを、それ程に嬉しがる娘の心しらいでならふか、あつさと受けても自害して死る覺悟は知りながらそなたの死る事きいたら思ひあふた久我之助俱に自害召されふも知れぬ、せめて一人は助けたさ、一旦得心したにして母が手づからさいた髮は下髮じやない、成敗のかき上髮介錯の支度じやわいの、尊いも卑いも姫ごぜのおつとゝいふはたつた一人穢らはしい玉の輿なんの母も嬉しかろ、祝言こそせれ、心ばかりは久我之助が宿の妻と思ふて死にや、エこれ程に思ふ中、一日半とき添ばしもせずさいの川原へやるはいの、と引寄〳〵雛鳥も膝に取付き抱付く、

忝なさと嬉しさと逢で別るゝ名殘の涙一つに落る三つ瀬川、川を隔てゝ清船が最期の觀念悪びれず燒刄直なる魂の九寸五分取り直し腹にぐつと突立るヤレ暫く引廻すな覺悟の切腹せく事はないコリヤ冥途の血脈、讀さしの無量品親が讀誦する間一生の名殘女がつら一目見てなぜ死なぬ、存じもよらず此期に及んで左程狼狽た未練な性根はござりませぬ、さりながら今の際の御願ひ私相果しときかば義理につながれ雛鳥も俱に生害と申すべしさある時は太宰の家も斷緣、暫くの間ながら切腹の義はお隱しなされ降參承知致せしていに後室方へおしらせあらば女も得心仕り、入内いたせば彼が爲、不義の汚名は受たれ共これぞ色に迷はぬ潔白チヽ出かしたよく氣が付た、年來立ぬく武士の意地不和な中程義理深し命を捨てるは天下の爲、助るは又家の爲、氣つかひせずと最期を清ふ花は三吉野、侍の手本になれといさぎよくいへど心の亂れ咲きあたら櫻の若者をちらす惜さと不便さと小枝にそゝぐ血の涙、落て波間に流れ行く、それとも知らず悅ぶ雛鳥アレ花が流るるは嬉しく久我樣のお身に恙のないしるし私は冥途へ參じます、千年も萬年も御無事で長生き遊ばして未來で添ふて下さんせと心でいふが暇乞ひ、思ひおく事言い置く事もふ何にもござんせぬ片時も早ふサアかゝ樣切て〳〵と身を惜まぬ我子の覺悟にはげまされ胸を定めて取上ぐれば刀は鞘に錆つく如く、離れかれたる血脈のきづな、今切殺す雛鳥を無事と知らする返事の櫻、同じく川に浮かぶればハアヽ嬉しや是ぞ雛鳥が入内のしらせ。之我之助が心の安堵、采女の方の御有かは最前申し上る通り此世に心殘りなし、御苦勞ながら御介錯、サア〳〵かゝ樣切つていの未練にござんす母樣と泣かぬ顏するいぢらしさ、刀持ても大盤石、思ひは同じ大判事、子よりも親の四苦八苦、命もちり〴〵日もちり〴〵そふじや早西に入る日輪は娘がお迎ひ彌陀の來迎西方淨土へみちびきたまへ南無阿彌陀佛と眼をとぢて思ひ切たる首もろとも、わつと泣く聲、こたゆるこだま、肝に徹して大伴事刀もちりと落たる障子マア雛鳥か首討つたか、久我殿は腹切つてか、ハ

アしなしたりとどうど座し、悔むも泣くも一時にあきれて詞もなかりしが良あつて定高聲をあげ入鹿大臣へさし上る雛鳥が首御檢使受け取下されと呼ばる聲を吹送る風の案内に大判事、歎きの姿改めて、衣紋つくろひしつゝとおり立、川邊の柳腰、娘の首をかき抱大判事樣、わけては何にも申しませぬ御子息の御命はどふぞと思ふた甲斐もないあへない有樣お前樣のお心も推量致しておりまする、添ふに添はれぬ惡緣を思ひ合ふたが互ひの因果、此方の娘も添ひたい〳〵と思ひ死、餘り不便に存じます、せめて久我之助殿の息ある中に此首を其方へお渡し申すが娘を嫁入さす心、げに尤も、嫁は大和、聟は紀伊の國妹脊の山の中に落る吉野の川の水盃、櫻の林の大嶋臺、めでたふ祝言さしませふわい、そんならこれまでの心もとけて、ハテ互にあいかけ同志、ヱゝ忝いと悅ぶもあとの祭り、ほんに脊たけ延びた者をいつまでも子供の樣に思ふてくらすは親の習ひ、あまやかした雛の道具一人子を殺して何にせふ、あとに置程涙の種、腰元共其一式殘らず川へ流され灌頂未來へ送る嫁入道具行器、長持、大張子、小袖箪笥の幾棹も命ながらへ居るならば一世一度の送りもの、五丁七丁續く程美々しうせんと樂しみに思ふた事は引かへて水になつたる水葬禮、大名の子の嫁入に乘物さへも中々に筐も仇の爪琴に首取り乘する弘誓の船あなたの岸より彼岸に流るゝ血汐清船が今はの顏ばせ見る親の口に祝言心の稱名千秋萬歲の千箱の玉の緒も切れて今はあへなき此死に顏、生て居る中ち此樣に聟よ嫁よといふならばいかばかり悅ばんに、領分の遺恨より、意地に意地を立て通す、其上かなる入鹿のうたがひ中直るにも直られぬ義理になつたが二人が不運、あれ程思ひつめた嫁何の入鹿に隨ふ、とても死なればならぬ子供一ときに殺したは、未來で早ふ添はしてやりたさ、言いあはされど後宝にもこれまで不和な大判事をあいやけと思し召さばこそ、せがれに立て一人の娘チーよくこそお手にかけられし、過分に存ずる、定高殿アゝ勿体ない其お禮はあちらこちらふつゝかな娘ゆへ、大事のお子を御切腹、器量筋目もすぐ

れた殿御おつとに持た果報者、とはいひながらあれ程まで手汐にかけて育てた子を又手にかけて切る心、サゝ推量致しておる武士の覺悟はつれながら、まさかの時は取亂し、介錯仕後れ面目ないイヱ／＼それでめでたい此祝言、これがほんの葬よ嫁入一代一度の祝言に聟殿の無紋の裃、首ばかりの嫁御寮に對面せふとはしらなんだ、それも子供が遁れぬ壽命兎にも角にも此の中の子といふ文字に死の聲のあるも定まる宿業と、隔つる心親々の積る思ひの山／＼はとけて流れて吉野川、いとゞ漲ぎるばかりなり、涙拂ふて大判事、首かき上て聲高くせかれ清船承はれ、人間最期の一念によつて輪廻の生を引とかや忠義に死ぬる汝が魂魄、君父の影身に付添ふて朝敵退治の晩軍さを草葉のかげより見物せよ、今雛鳥とあらためて親がゆるして盡未來五百生までかはらぬ夫婦、忠臣、貞女の操を立死したる者と高聲に焔魔の廳を名乘て通れなむ成佛得脫と唱ふる聲の聞へてや物得いはねどあはす手をあはせかれたる此世のわかれ早日もくれて人顏も見へず庵りのきりかくれ、うづむ娘のなきがらはこなたの山にとゞまれど首は脊山に檢使の役目、我子の介錯涙の雛よしや世の中うき事はいつかたへまの大和路や、後に妹山先立脊山、恩愛義理をせきくだす、なみだの川瀨三吉野の花を見捨て出て行く。

河庄の段

中

竹本相生太夫
鶴澤綱右衛門

豊竹呂太夫
鶴澤友清
鶴澤清二郎

切

竹本津太夫
鶴澤綱造
豊竹古靱太夫
鶴澤清六

心中天網島

河庄の段

この淨瑠璃は文豪近松門左衛門が一代の傑作と謂はるゝ名作で享保五年十月十五日の明け方大阪網島大長寺で情死をした小春治兵衛の件をすぐさま脚色して十二月六日初日で竹本座にかけたもので以來心中物の白眉とされてゐます。天滿の紙屋治兵衛は妻子ある身ながら曾根崎の紀の國屋小春と深く契ります。兄粉屋孫右衛門は是を憂へて侍姿に身を扮し河庄に到り小春に遭ひ二人の仲を割かさうとし折から一ト目でもと小春に會ひに來た治兵衛にも意見を加へます。

（床本）河庄の段（中）

よれが悲の庭深き、是かや戀の大海を、かへもほされぬ蜆川、思ひ〳〵の思ひ歌、心がこゝろとゞむるは、門行燈が文字が關、浮れぞめきの仇淨瑠璃、役者物まね流行歌、一階座敷の三味線に、引れて立寄る客もあり、紋日遁れて顔隱し仕過ごしせじと忍び風、橘の名さえも梅櫻、花をそろへし其中に、南の風呂の浴衣より、今の新地に戀衣、紀伊國屋の小春とは、此十月に仇し名を、世に殘せとの印かや、今宵は誰が呼子鳥、覺束なくも行燈の影、往來ふよれの立留りや、小春樣のなんどいの氣色も惡いか顔も細り、いこふやつれさんしたのふゝほんに誰やらが咄で

人形

紀の國屋　小春　吉田文五郎
河庄女房　桐竹紋太郎
江戸屋　太兵衛　吉田小兵吉
五貫屋善六　吉田玉幸
粉屋　孫右衛門　吉田玉次郎
河庄亭主　吉田文之助
女郎　桐竹紋司
伸居　吉田文二郎
紙屋治兵衛　吉田榮三

聞ば紙治様故内はらたんの客の吟味にあはんしてどこへもおさとは送らぬのイヤ太兵衛様に請出され在所とやら伊丹とやらへ行んす筈共聞及ぶがどうで御座んすアヽモ伊丹〳〵といふて下さんすな、夫ではいたみ入るわいなアいとしぶなげに紙治様と私が中左程にもない事をアノぜいこきの太兵衛めが浮名を立このいひちらし、客といふ客は退果、内からは紙屋治兵衛故ぢやとモせく程に〳〵文の便も叶はぬ様に成やした、ふしぎに今宵は侍客で、河庄方へ送らるゝが、斯う行く道で若し太兵衛めに逢ふかと氣遣ひさ、ホンニもう敵持同然の身持ぢやわいな、ムゝ、そんならちやつとはづさんせ、アアレ〳〵一丁目からのんこに髪結てのうしい立衆自慢といひそふな男たしかに太兵衛様と見た、アレ〳〵爰へといふに小春はムゝすかん、コレ〳〵こなさんそこへ頼むぞへ、宵の中は往來にまぎれ人連れずにわしや河庄へ行ぞへムゝよかろ〳〵爰へ太兵衛様が見たらばわしがちよつぽくさ、サア〳〵この間に行かしやんせと、おゝひに成たる其隙に人立紛れにちよこ〳〵走りとつ河内屋へ駈け込めばムゝこれは〳〵マア〳〵早いお出ホンニお名さへ久しう云はなんだに、ヤレ〳〵珍らしい小春様はる〳〵で小春様と、主の花車が勇む聲アヽコレ門へ聞える高い聲して小春〳〵といふて下んすな、表へいやな毛虫客が來るわいな密に〳〵頼やすと、云も洩てやぬつと入來る、二人

連アイヤコレ小春殿、毛虫客さはよい名をつけて下んした、先おれから云ませうかい、ヤコレ善六我も知つて居るこの小春頓て太兵衛が女房に持か又紙屋治兵衛が請け出すか張合の女郎ぢやマア近付になつておきやとのさばり寄ればエヽ聞こもない〳〵〳〵えしらぬ人の浮名を立て手柄にならばせい出して云はんせ〳〵この小春は聞こもないこ、つひこ廻ば又摺り寄アヽコヽヽヽ聞こむなく共ヘヽヽ小判の響で聞せて見せふ、が又貴様もよつぽど因果者じやわい天滿大阪三郷に、男も多いに紙屋治兵衛二人の子の親、女房は從弟同士舅は伯母聟あい〳〵に問屋の仕切さへ追るゝ商賣夫れにまあ十貫目近い銀出してイヤ請出すのヤ根引のこはソリヤコレ螻蛄が斧でござりやすてハヽヽヽ其樣な男がやつぱり可愛ござりやすかイヤサお前は治兵衛樣が可愛ふござりやすかいな、我等女房子なけばれ舅もなし、又伯父も持たずヘヽン身すがらの太兵衛こ名を取つた男色里で僭上いふ事は治兵衛めには叶はれ共ハテモ銀持た計は太兵衛がまさつた、銀の力で押たらばノウ善六何に勝ふも知れまいわい、今宵の客も大方治兵衛めぢや有ふサアもらを〳〵〳〵小春はこつちへもらをチヽ此みずからがもろうだぞ、サア花車酒出しやいの〳〵〳〵ムヽ何をしやんすやら、今宵のお客はお侍衆、追つけ爰へ見えませふ、お前はどこぞ脇で遊んで下さんせ、ヤ侍客ぢや、侍何ぢや〳〵ヘヽ何の刀さすかさゝんか侍も町人も客は客ぢやわい、何ぼさしても五本六本はさすまいし、よふさして刀脇差たつた二本ぢやい、二本差がこわいかい〳〵二本差がこわけりやなア田樂屋の門を通れんじやないかい、ハヽヽヽイヤコレ花車、此頃仲衆仲間のはやり文句、コヽヽヽ小春もよふ聞きや、ヤコリヤ善六そこへまアわれ覺えた通り、やつて見い、チツト承知の助ぢや、やる〳〵が素ではちつと間がぬけてやりにくいなムヽ太兵衛樣、おまはん、ずるてんあらふてんか、エヽ、ずる天、チヽヨシ〳〵ムヽ幸こゝに籌がある、是でやつてやろう、エヽほうきハヽヽヽえヽ三味線ぢやなアドレ〳〵烏渡拜見のいたそふヨチしゆろ胴に竹の丸さ

ほとけつかるわい、ハーーーーサーーー皆に聞かすのぢや一ばいに張込んでしつかりやつて吳れ〳〵ウソなら一寸調子聞して三味線彈左の方へすはりんか、アーわりに不器用な男ぢやなア、エーー何かすぞいサア〳〵早ふやつて吳れ、そんなら一寸調子聞かしてんかチツトこんでる〳〵マア一聞かしてんか一を、ヨシソリヤ一じやぞドン〳〵〳〵御堂樣の太皷のやうな音ぢやなアハーーーサア二二、二かへ、ヨシ〳〵ドン〳〵〳〵〳〵アヽ茶屋の段ばしご登つてゐる樣な音ぢやなアハーーーー三聞かして三をチツト三ぢやなアヨシ〳〵テン〳〵〳〵〳〵アまるで紙屑屋のおんごくぢやがな、てんごいはずとサーーーやりまつせ〳〵しかし一寸口上云ふは口上をエヘン〳〵〳〵〳〵東西〳〵此所にて語りまするは、紙屋治兵衛、紀伊國屋小春、つまらん菊浮名の蜆川、相勤めまする太夫、竹本善六太夫、三味線さぐり澤太兵衛樣東西〳〵〳〵拍子木チヨン〳〵〳〵〳〵〳〵口三味線アペン〳〵ペペン〳〵ペン〳〵〳〵ペペンン〳〵〳〵ペペンペンポン、結ぶのペペン〳〵〳〵ペポン〳〵〳〵ヤペンポペンヤペーーーー神の紙屑に貧乏ポコペン紙屋のンヤ治兵衛の女房のおさんに子の有、其子の湖たれお末に勘太郎チツトドツコイすそ貧乏小春に命ちり紙の紙子姿ぞ茶袋紙チヤチヤン〳〵〳〵〳〵、チツト善六もふよい〳〵、小春殿、何とよい文句で有ふかのと、惡口難言こうゆる小春、門にも忍ぶ侍客物をも云はず内へ入、太兵衛が胸ぐら捻ぢ上ればアイタ〳〵〳〵コリヤ何とした る、イヤサ何共せぬが、この大小が目にかゝられば明き盲も同然赦しにくい奴なれ共、所がら故赦して吳れると、つと〳〵失ふと突飛されてへらず口、エー忌々しいわい〳〵〳〵イヤコレ善六是から一遍ぞめいて來たろ、どこぞではナソレ、今の紙屑めに逢ふも知れまい、エーうぢ〳〵せずとサア來いと身振り計りは男を磨く町一杯にはたかつて、打連てこそ歸りけろ、所柄とて馬鹿者に構はずこらへる武士の客、紙治〳〵とよあらの、噂小春が身にこたへ、思ひくずおれうつとりと、無挨拶なる折節に内々走つて紀伊國屋の杉がけふ

とひ顔付にて、只今小春様送つてさんじた折お客さんまだ見へず、なぜマアとつくり見て來んと、酷ふ呵られます慮外ながらちよつと〻差覗きム〻そうでない〳〵氣遣ひなし後詰めてしつぽりと小春様したゝる檀の生醤油花車さらば後に青菜のひたし物。口合たら〳〵立歸る、しごくかた手の侍大きに不興しコリヤ何ぢや、人の顔を目利きするは、身を茶入茶碗にするかアゝなぶられには來申さぬ、此方の屋敷は出入かたく、一夜の他出も留守居へ斷帳に付、六ツケ敷き掟なれ共お名を聞て懸ひ慕ふたお女郎、何でも一生の思ひ出おなさけに預ろうと存じたに、いつかなにつこりと笑顔も見せず一言の挨拶もなく、懐で錢よむ様に、扨〻うつむいて計りイヤナニ、首筋が痛みはいたさぬか、コレ小春殿〳〵ハ〻〻花車殿茶屋へ來て産所の夜どぎする事は、モ終になないずとつぶやけばム〻いわくを御存じない故にお腹の立つは御道理〳〵、この小春様には紙治様と申す深いお客がござんして、けふも紙治様、明日も紙治様とわきからは手さしもならず外のお客は嵐の木の葉で、ばら〳〵〳〵登りつめたる揚句には得手怪我の有る物と、せくはごこしも親方のならひ、夫れ故お客の吟味、おのづと小春様もお氣の浮かぬはお道理、〳〵の中取て主の身なれば御機嫌よかれが道理の肝心かんもふ、サアどつと呑かけわさ〳〵わつさり頼みやす、コレ小春様と云へ共何の返答も涙ほろりの顔ふり上、アノお侍さん同じ死る道にも十夜の中に死んだ者は佛になるといひますが定かいなア夫れを身がしる事か、ソリヤ旦那坊主にお問なされム〻ホンニそんなら問ひたい事が有わいなア自害すると首く〻るは定めしこの咽を切方がたんと痛いでござんせうな、ム〻痛むか痛まぬか切てはみて大方な事問つしやれアゝ小氣味の悪い女郎ちやと遣の武士もうてぬ顔コレ小春様初對面からあんまりな、御挨拶ちつと氣をかへ奥で酒に致しませふ、いか様酒は能くござるふヤナニ、小春殿お來やらム〻かた、サア小春様、お出いなアコレ奥へお銚子持つておちやと、高い調子は合ねども引立られて是非もなく打連れ奥へ入にける。

（床本）河庄の段（切）

天満に年經る。千早振。神にはあらぬ紙様と世のわに口に乘斗り。小春に深くあふぬさのくさり合たる御注連縄。今は結ぶの神無月堰かれ逢れぬ身と成果あわれ逢瀬の首尾あらば夫を二人が最期日と名殘りの文の云かわし毎夜〳〵の死かくご。魂抜てとぼ〳〵うか〳〵身を焦す。煮賣屋で小春が沙汰。侍客で河床方と耳に入よりサア今宵と。覗く格子の奥の間に。客は頭巾の頤の。動く斗に聲聞へず。可愛く小春が燈火に背けた顔のアノ痩た事わいの。心の中は皆おれが事。爰に居ると吹込で連て飛なら梅田か北野エ〜知らせたい呼たいと心で招く氣は先へ身は空蟬の抜殼の格子に抱付あせり泣。奥には客が大欠伸。思ひのある女郎衆のお伽でイヤモとんと氣がめゐる。門も靜な端の間へ出て行燈でも見て氣を晴さふサアござれと連立出れば なむ三寶見付られじと身を忍び隠れて聞共内には知らず。なふ小春殿宵からのそぶり詞の端に氣を付くれば花車が咄しの紙治とやらと心中する心と見たヤけ違ふまじ死神の付た耳へは意見も道理も入まじとは思へども去とは愚痴のいたり先の男の無分別は恨まず一家一門そなたを恨み憎しみ萬人に死顔さらす 身のはぢ親はないかも知れども若しあらば不孝の罰。佛はおろか地獄へもコレマあたゝかに二人連では落られぬヤ〳〵アゝ勞はし共笑止共一眼ながの武士の役見殺しに成がたしコレ定めて金づく。五兩十兩は用に立ても助たし何と死る氣に違ひはあるまいかの神八幡。侍冥利コレ他言せまじ小春心底殘さず打明きやれ、サゝどふじや〳〵と囁けば手を合せエ〜忝いありがたい馴染よしみもない私。御誓言での情のお詞涙がこぼれて嬉しうござんす。ほんに色外にあらわるとお前様の推量の通り紙治様と死る約束親方にせかれて逢瀬もたへ差合あつていま急に請出す事も叶す南の元の親方と爰とにまだ五年ある年の内人手に取られては私は元より主は猶一分立ずいつそ死でくれぬかエ〜死ましよと引に引れぬ義理詰に、ふつと言替し首尾を見合せ相圖を定め抜て出よふ抜て出よといつ何時を最期

共其日送りのあへない命私一人を頼みの母様死だ後では袖乞非人の飢死もなされふかと是のみ悲しき私迚も命は一つ水くさい女と思し召のも恥しながら其恥を捨てゝも死共ないが第一死ずに事の濟様に。どふぞお前を頼みます。と語れば默き思案顔外には、つと聞て。驚き思ひがけなき男氣。木から落たる如くにて氣もせき狂ひエ、扨は皆嘘か二年と云物化された根性くさりしアノどう狐踏込で一討か。顔恥かゝせて腹いよかと。齒ざり〳〵口惜涙内にも小春が託ち泣コレ申モ卑怯な頼み事ながら。お侍様のお情に今年中來春二三月の頃迄も私に逢て下さんして彼男のくる度毎に邪魔に成て期を延し期を延せば自手を切て先も殺さず私も命を助る道理何の困果で死る契約した事ぞと思へば悔しうござんすと。口と心は裏表絞る袂は雨露の膝にもたれて泣き居たる。アヽ聞届たそなたの願ひコレ風もくる人や見ると格子の障子ばた〳〵と立聞治兵衛が氣も狂亂エヽ流石賣物やす者め胴性骨見違へし。エヽ口惜や切ろか突ふかどう障子に移る二人の横顔エヽくらわせたい。ばりたい何ぬかすやら默き合。拜む嘔くほへるさま胸を押へさすつてもこらへられぬ勘忍ならぬと心もせきに。せきの孫六一尺七寸拔放し格子のさまより小春が脇腹爰ぞと見きわめぐつと突に。座は遠く是はと斗怪我もなく透さず侍飛かゝり兩手をつかんでぐつと引入刀の下緒手ばしかく格子の桂にがんじがらみにくゝる内立歸る此の家の夫婦ャア是はとばかり驚けば。苦しうない〳〵障子ごしに拔身を突込あばれ者腕を格子に括り置たれば氣づかいな事はない。そなた衆は小春を連て奥へ行きやれ身共はアノ狼狽者何故斯様の狼籍をいたすぞ詮議するサア〳〵早く奥へ行きやれ〳〵イエ〳〵お前斗爰に置ましては浮雲ござりますイヤサコリヤ人立あれば所の騷ぎ大勢が立合口論に及べば武士の立ぬ様に成るまい物でもない。と云も遊所故身も忍びの遊興、よい〳〵身共斗り爰に居て氣づかひならいつしよに奥へいかふ小春〳〵おじや。いて癒よふアイあいとは云ど見知ある脇指のつかれぬ胸にはつと貫き治兵衛様何が何とイヤサア慈悲と

云事がなければ人は難儀をするげな餘まり酒を過して色里にはあるならい。沙汰なしに。いなしてやらんしたらナア。河庄さん。わしやよさそうに思ひます。いつそ此縄といて。アコリヤ〳〵其縄とくな〳〵。括り付しは仔細あり身次第にして皆奥へ夫れでもお前ハテ構はずと小春おじやいのと。打連立て奥の間の影は見ゆれど括られて格子手柵にもがけばしまり身は煩悩に縛かるゝ犬に劣つた生恥を覺悟極めし血の涙絞り泣こそ。ふびんなれ、そめき戻りの。身すがら太兵衛善六伴ひたち歸りヤイコリヤヤイ〳〵こうし覗いてけつかるはどいつじやい〳〵エヽいやみたやつじやな、コリヤ頬かぶり取〳〵エヽほうかぶり取りやがれヤ治兵衛がわれに逢たふて〳〵宵から一遍尋たはやい。サア廿兩の金戻せ。ムヽ廿兩の金とは。ヤアとぼけなやい。確な證據と懐の紙入より證文を取出し。コリヤ是を見い。エヽ一つ金子廿兩也右は今日入用に付難儀いたし候所御取替下され候段御慈悲の程忘れ申さず。あり難く存奉り候何時成共此手形を以て。きつと返濟申べく候後はお定りじや。江戸屋太兵衛殿紙屋治兵衛判こりやわれが直筆じや〳〵ぞよ。是でも覺へがないかサア夫は此間石町の御出家に。ヤアどこへぬけ〳〵〳〵と。そふわ拔させぬ。コリヤ證文が物云ふはやい。何じや逢たい。逢たいとは誰に逢ひたい、アヽコレ〳〵太兵衛さん、ぐづ〳〵いふにや及ばぬわいのヲヽそふじや〳〵エヽうしやがれアイタ〳〵〳〵ハヽハヽ善六、ちよつと見い〳〵治兵衛がいたいとぬかすはづじやコヽヽこれ見いしばり付けられてけつかるはいエヽどこにほんにけつたいなナアこりやまどふしたんじやろうなエヽ聞えた扨は盗ひろいだな大騙め。がん盗め。息ずりめと。蹴飛し蹴ちらし。はり廻しコリヤ紙屋治兵衛が盗して縛られたと。呼はりわめけば往來ふ人邊近所も駈集る。内より侍飛出善六を突飛し太兵衛が腕捻上ればアイタヽヽヽヽこりや何とすりや。此治兵衛には仔細あつて某が縛置く己らが土足にかけ盗賊とこの狼藉己最前是へ參る砌無禮を働く泥坊めサア治兵衛が何盗んだ騙とは何を騙つた。サそれぬかせアヽ

コレ〳〵お侍證據のない事云はふかい。コレ此證文が確な證據コレ見やれいの。何んとはかりやしたか夫れほど恩を見せた廿兩添ないと禮はぬかさず。イヤ坊主じやのイヤ御出家のと。間に合をぬかす故騙と云ふたが誤かヤちつとそふもあるまい。ドレ其一札と取にかゝるを孫右衛門透さず投出す廿兩太兵衛が顔に打付けるアイタ〜〜〜〜治兵衛が借た廿兩エ〜ハイ是は〳〵御きんとうまにそんならおいたゞき申しましよふかい。エ〜コリヤ後で小言を云ぬやう一兩〳〵吹て受取おろう。ハイヘイ〳〵〳〵申分はないか。イヤモ金請取ば云分は。ござりませぬ云分なくばコリヤこうと太兵衛がゑり髪引摑む是はと立寄る善六を沈んで投付又起上る太兵衛をば蹴飛し〳〵投ちらせばほう〳〵起て睨廻し。ヤイおのいら。よふ見物して叩かせたな一々に面見覺へた。返報する覺へておれとへらず口にて。逃出す立寄人〳〵どつと笑ひ。ヤアどつかれてさへアノおとがい橋から投て水くらはせやるな〳〵と追かけ行、人立透ば侍立寄て括りめ。とき頭巾を取捨コリヤ此面を見よヤ兄者人と逃んとすれば孫右衛門引ぎゞめヤ動きおるまいうぬサア云事がある。うせうと引立内に引居れば兄者人〳〵〳〵面目なやと。どふど座し。疊春ひれふし泣居たる扨は兄御樣かいのと。走出る小春が胸ぐら取て引ゑヤ畜生め狐め太兵衛より先うぬをと。足を上れば孫右衛門ヤイ〳〵〳〵其たわけから事がおこるわい。コリヤ人をたらす遊女の習ひ儕が目には今見へたか此孫右衛門はナ。たつた今一眼にて逢た女郎の心底を見ぬゐて居るわい小春を蹴る脛で狠狽た其儕が根性をなぜ蹴ぬエ〜是非もなや。弟とは云ながら三十におつかゝり勘太郎お末と云六つと四つの子の親六間口の家を持身代潰るゝ辨へなく兄の意見を請る事かい舅は伯母聟姑は伯母者人親同然女房おさんは我爲には從弟結び合〳〵重〳〵の縁者親子中一家一門參會にも儕が曾根崎通ひの悔より外餘の事は何にもないはい いとしいは伯母者人連合五左衛門殿はにべもない昔人かゝの甥御に倒され娘を捨たおさんを取かへし天滿中に恥かゝせんとの。お腹立伯母者人の

氣扱ひ敵になり味方になり病になる程心を苦しめコリヤ儕が恥を包まるゝ恩知すこのばちたつた一つでも行先に的が立斯ては家も立まじ小春が心底見とゞけ其上の一思案伯母の心も休めたく此亨主に工面し儕が病の根元見届くる女房子にも見かへしは尤〳〵心中よしの女郎アゝお手柄〳〵結構な弟を持。人にも知れし粉屋の孫右衛門祭りの禰り衆か氣違かついに差ぬ大小ぼつ込藏屋敷の役人と歌舞伎役者のまれをして馬鹿を盡した此刀おりや〳〵捨所がないわいやい。小腹が立やら、おかしいやらあまりの事でエゝ胸が痛いと齒ぎしみし泣顔隱す皺面に小春は始終むせ返り我身の上は忘もいはず兄の意見と母親の心づかない思ひやり。みなお道理と斗にて詞も涙にくれにけり治兵衛涙を押拭ひアゝ誤つた〳〵誤りました。兄者人三年先よりアノ古狸に見入られ親子一門妻子迄そばになし身代の手縛れも。小春と云ふ家尻切にたらされアゝ後悔千萬モゝふつゝり心殘られば足むきもするまじヤイ狸め狐め家尻切め貧乏神の親玉め思ひ切たと云證據是見よと肌にかけたる守二つ月頭に一枚づゝ取かわしたる起證合せて廿九枚戻せば戀も情もないコリヤ請取とはたと打つけ申兄者人あいつが方のわれらが起證數改て請取てお前の方で火にくべて下さりませ。ヤア何といふスリヤふつゝりと思ひ切たかハイ微塵も心は殘らぬなム。ハイ。チゝ出かした男じや人中で面恥かゝせた孫右衛門血を分た兄じやと思へばこそ、よふ思ひ切た嬉しいぞよ。イヤナニ小春殿こちの治兵衛は男でござる。さつばりと思ひ切ました今迄は小澤山によふ書てやつて下さつた、此起證返しますと治兵衛が方から何やら書てやつた物があるげな夫をこつちへ返して下されハテ今に成て何のうぢ〳〵。サ早ふ是か〳〵と懷へ手を差込て守袋引出す一通ハテおしうもない此紙屑殘らずお返しなされと云つゝ讀文見て喫驚ナニ小春殿參る紙屋内アゝコレそりや見せられぬ大事の文と。取付手をとり孫右衛門ムゝスリヤこな樣此狀の客へ義理立て。コレ申兄者人何所の客からきた狀じやちよつと見せてハテ扨ごこの客から狀が來ふと思ひ切た女郎の事、わがみの構

ふ事はないサ〜そつちへよつて居やコレ〳〵小春殿最前は侍冥利は今ば粉屋の孫右衛門商ひ冥理女房子限つて咄しはせぬアヽ勤の中にも夫程迄イヤサ眞實のないはへヽ女郎の常じや。最前の水くさい詞はこう云狀が來てあるから是じや物。道理じや〳〵夫に心中仕て死ふとはマいかいあほうではあるはい、思ひ廻せば廻す程おかしいやら不便なやら餘りの事で涙がこぼれるハヽヽヽヽと笑ひに紛らす眞實は口に云れぬ心の禮孫右衛門樣必ず其文外へ見せて下さりますな起證と共に火に入るコレ誓言に違ひはないアヽ忝ない。それで私が立ますと又伏沈めばアハヽヽヽヽ何の儕が立の立ぬとは人かまし、もふこう成からわ片時も面が見さもないサア兄者人歸りましよ〳〵いか樣最前からの樣子腹が立ふサアそんなら同道しませうサア先へ行きや。ハイ。行きやれ〳〵エヽ行やいのと云にしほ〳〵立出る。兄者人どうも爰がたまりませぬ今生のおもひ出にたつた一つあいつが面をと走りよるをアヽコリヤ〳〵立さはいでごふすひのじやハイごふも仕や致しませんそんならごふもせんならこゝからいうたらよいわいハイ何んの口でいう斗りでございますそんならゑいハイエヽナエヽ何んにも言はいでもよい事ヤイ赤狸め儕故に面恥かき。足かけ三年と云物戀し　ゆかし。いとし可愛もけふと云けふ。愛想が盡た。はいたつた此足一本の暇乞と額際はつたと蹴てわつと涙出す男氣を思ひやる程堪兼て。もふこりやごふも。いつそ心を打明てコレ〳〵蹴れふがたゝかれふが、そこをじつとしんぼうせずば此狀の客へ義理が立つまい〳〵がの小春殿と孫右衛門に制せられハアヽはつと斗に泣別れ歸る姿もいた〳〵しく、後を見送り聲を上なげく小春もむごらしきぶ心中か心中か誠の心は女房の其一筆のおく深くたが文も見ぬ戀の道別れてこそは立歸る。

三十三間堂棟由來

夢にちる柳　竹本鐵太夫　豊澤新左衛門

鳥目になやむ孝子　切　竹本大隅太夫　鶴澤道八

母の木をはこぶ稚子　竹本小春太夫　竹本源路太夫　竹本陸路太夫　豊竹小松太夫　竹本常子太夫　鶴澤芳之助　鶴澤重友　鶴澤友平　鶴澤寛友　若市

卅三間堂棟由來

寛暦十年十二月豊竹座上演の『祗園女御九重錦』の三段目がこの柳のお柳の件で『卅三間堂棟由來』の原作になつてゐます。作者は若竹笛躬中村阿契の合作です。織込まれたる内容を申上げますと、白河法皇が御腦を病ひ給ふ原因は院の御前身たる熊野の蓮花房といふ高僧の髑髏が岩田川の水底に沈みそれが岸の柳の根のもとに埋もれてゐるため柳の木が風にそよぐまに〳〵御腦になるといふ神僧のお告げに法皇は直ちに北面の武士横曾根光當に院宣を賜はつて髑髏の詮議と花房王院即ち卅三間堂建立の用材切り出しを命じ給ひました。ところが横曾根の同役で腹黑い岩淵時澄は彼を不首尾に陷らせ自ら奉行の役を奪つて熊野へ下りました光當は功成らぬを恥ぢて切腹して果てます。一子平太郎は瀧本の庄司の娘お柳と契つて線丸と呼ぶ一子を生けました。お柳は實は平太郎に助けられた柳の大木の精の化体であつたのです。卅三間堂の棟の用材にこの柳の大木が切り出される事になり老木は伐り倒され根元から髑髏も掘り出されました。木遣り音頭勇ましく曳かれて行く柳の大木がその途中で動かなくなりましたが線丸が音頭を取つて手をかけると易々と曳かれて行つたといふ草木成佛に絡る親子の恩愛を現はした京は卅三間堂棟の由來

鶴澤友作　鶴澤吉左二　野澤喜代之助　竹澤團二郎　野澤伊三郎　豊澤新太郎　野澤勝芳　鶴澤清治　鶴澤綱茂

の傳説を叙した名曲で御座あます。

（床本）

夢やむすぶらん。妻は儚りを立退いて。奥を覗いて立戻り、おづおづ儚へ立寄って、ゆり起せども夫は寢付の高鼾。風が持てくる斧の音、伐木こう〳〵てう〳〵と。木を伐音やこたへけん。お柳は身内の苦しみを、じつとこらへて立寄れど、得も岩代の結び松、我は柳の緑子が、顔を眺めつとつ置いつ、詞チゝそれよ互に顔を合せては、身の上語るも面はゆし、寢入給ふを幸ひに、今自が云ひ殘す、必ず夢と思はずに、白地と聞いてたべ。詞ノウ我こそ誠は柳の精、雨露の惠に生育ち、かやうに夫婦と成る事も一方ならぬ因緣ぞや先の生にて誓たる、契りを結ばん其の爲に、假に女の姿と變じ、柳も本に待受て、夫婦となりしも、五とせの、春や昔の春の頃、詞季仲が鷹狩に、鷹の足緒のかゝりし時、數多の武士に切崩され、既に枯なん此柳、其時に、お前が一矢の手柄、鷹を助けて葉柳の、枝に障りも、あれ〳〵〳〵、又もや愛にちりくる葉は、我を迎ひに來るかと、思へばやる方詮方、もなく〳〵見やる足元へ、ちりくる柳の葉隱れや、亂るゝ心押しづめ。詞其時の情の恩、送る月日も重なりて、柳の花のコレ此緑丸、最早今年で五歳の春秋の重なれば、乳がなくも育つべし、成人の後々は、父の弓矢を請傳へ、潔い名を上てたもや、ヤ、母は今を限にて、元の柳に

人形

平太郎母　吉田玉七
女房お柳　吉田文五郎
悴　緑丸　吉田榮三郎
進野藏人　桐竹門造
横曾根平太郎　桐竹政龜
和田四郎　吉田玉松
木遣人足大ぜい

返るぞや、必ず草木成佛と、回向を頼む夫よ子よ、離れがたなや悲しやと、いふ聲さへも忍び泣き、立つて見、居て見聲を上げて、わつと斗りに泣叫ぶ。音に目覺す平太郎、扨は夢とも現とも、聞しは誠で有けるか何迚難面くやるべきぞと、抱き留むれば一間より、老母も倶に轉び出で

詞 樣子は聞いたこれお柳、嫁女なうと呼ぶ聲も、ちりくる柳の葉隱れに形ばきへて失にけり。そこよ爰よと母と子が、尋れる音に線丸。詞かゝ樣どこへいかしやつた。かゝ樣いなう、なうかゝ樣と、父が後につけ廻り、尋れ迷ふ幼子を、見るに堪えかね、父親も詞線が母やい、嫁女なうかゝ樣と、聲をばかりに三人が尋れ廻れば遮にも引かるゝ心執着の、又も姿を現はす有樣、ヤアかゝ樣かとかけ寄る幼子、夫も涙の聲を上げ。

詞 非情の草木と云ながら、情有ればこそこれ迄に、睦じくも馴なじみ、一人の若を設し身が、何迚ふり捨て歸りしぞ、せめては母を見送る迄、倶に介抱してくれよと、託ち歎けば漸々に、しほるゝ顏をふり上て、詞傳へ聞く安部の童子が母上も、丁度我身と同じ事、一人の子を殘し置き信田の古栖に歸りしとや。夫は野干の年經る身、我は元來草木の、歸る古栖の柳は今、伐崩されて枯柳、歸るといふは消ゆる身に、何迚形を殘すべき、哀れと思し給はれよ。詞白河の法皇の御惱しきり迚、都の使來たりつゝ我身を切捨て申す也、もはや朽木も時を得て、一宇の棟と成る事も、一つは妙なる法の緣、佛果に連し緣あれば、情の恩を報ぜん爲、一つの筐を參らすると、平太郎が手に渡し。詞それこそは、白河の法皇の前世の御頭也、それを手柄に御身の上、再び出世をなし給へ、必々線が事、お賴み申し參らする。詞エヽエヽ、離れがたなや可愛やな。合あれ〳〵風の音に連れ、柳の糸を切拂ふ、斧鉞がてう〳〵〳〵、衍は爰に玉きはる、時にそきたれいざさらば、さらば〳〵の聲の下、姿は見えず成にけり。わつと斗りに三人は、暗より暗に迷ひつゝ、互に手にて手を取りかはし、前後不覺に歎きしが、涙ながらに平太郎我子を膝に抱き上げ、詞なう母人、我よりは此若が愛着に引かされて、嘸や名殘の惜から

ん、たとへ姿は見えず共、柳は妻が亡き佛今一度此縁に、見せもし、我も見もしたし藏人とやらんにも對面せん、母人には此髑髏、佛間へ直し下さるべし某は今直に伴を連れて柳の元へ、チヽ夫れ〳〵一時も早う孫を連れて、ハヽア、然らば直ぐさま、サア縁よ來いと、我子の手を引き二足三足、深山隱れの山寺の、入相告ぐる鐘の音。合かぞへながらもそろ〳〵と、さぐる足もと見付る母。詞これ平太郎、そなたは何とぞ仕やつたか。これば〻樣、と〻樣は目が見えぬいのウ。ヤア〳〵そりやマアいつからハイされば御座ります、一月餘り、ふと鷄目が發ましたが、女房に言ひ含め、是迄はお隱し申た。エヽ聞えぬ平太郎、さういふ事ならとくよりわしにも。アヽコレ、何にもお構ひなさるゝな、したがおまへ樣にも此坊めも、今夜から嘸便りが。チイノ折も折とてそなたの眼病、猶更わしも力がない。アヽアレ、アレモアノ雪のふる事わいのマア火を燈しませうと行燈の灯を提燈にうつし持つたる綠丸、簑よ笠よと打着せて詞そんならちよつと參つてさんじましよ。ガヽ怪我せぬやうに、ソレ縁よ、手を引けよ。あい〳〵〳〵。あいろは見えぬ鵝目の父、杖と我子を力草、柳も本へとたどり行く。母は佛間の看經に、鉦も幽に六字詰、風も身にしむ黄昏過、心を鬼の和田四郎、晝の街の兼てより、夜は山賊の大膽不敵。何でも掘出しゝこためんと、大だら指足鎧ひ足、ぎしつく疊の物音に、誰じや〳〵、詞イヤ大事ない盜人じや、ヤアと惚り仕ながらも。詞イヤ〻ウ折角這入らしやつても見込のない此内、了簡して退んで下され。イヤコリヤ婆、おれじや、晝來た者じやが見知らぬか。ムウナニ晝來たといやるから

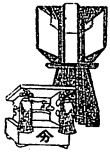
にぎり專門
大三鮓
新町通槌屋横南
新町人氣男
電新町二八八七番

は、チヽ畑主こいふたはアリヤ嘘じや、山家のところくに似合ぬ黄金十枚は、ハヽよい仕物、まだ臍くりが有るで有ろ、ありたけそこへさらへ出せ、コリヤ命は助けてやるわいやいと鯉口ならしおどしける、詞エヽ口惜い、夫と知つたら其時に、やみ〳〵とはやるまい物、エヽ平太郎は戻らぬかいのエヽやかましいわい、コリヤ、モウどうですなをでは出しをるまい、捜してくれんとかけ行を、さうはさせぬと取付くを蹴飛し〳〵、のつかのか、納戸を引出す古葛籠、あたふた開て手にあたる親子が着がへに包んだ大小、鮫は鼠がまだ外に、御明上た釣なまへ、備へし髑髏を見て悔り、どこやらぞヽ髪立退しが、打點いてコリヤ婆よ、葛籠に刀があるからは涙人に極つたが又あの髑髏は何の爲じや、サアそれぬかせ、チヽあれはの、息子が出世する大事な物じや。ムヽ何じや出世するか、其出世が猶耳寄じや、是や何者の髑髏じや、サアぬかせ、ぬかさぬかやい、ぬかさにや斯うぢやと引拔くだんびら、目の先きへさし付くれば。詞アいやや〳〵〳〵たとへすたゞに切られても、言はぬ〳〵ヤアしぶとい老ぼれめ、骨をひしいで云はすると命もあら繩見付出しがんぢがらみにぐるゞ巻、見上ぐる燈籠の釣繩ほどき、結び付たる猿縛り。詞サア〳〵ぬかせ〳〵、といふては引ぱる釣繩に次第にしまる縛り繩、血筋赤らむ蔦紅葉、命の蔓ぞ危けれ。詞ハヽヽヽ、はもがくは〳〵、情の強い根性から、痛い目を見をるわい、コリヤ下は滑の溜り池氷りの地獄じや、サアぬかせ〳〵と責ぜつてう。老母は苦しさ聲も出ず降くる雪に爭ふ白髪、餌にしたふ血の涙、見やる向ふに提燈の、光りに悔り、なむ三と繩を放せば眞さか様水の

當文樂座より南へ二丁

山家屋見臺店へ

見臺並社杵



大阪市南區佐野屋橋筋清水町入

電南四四二八番

振替大阪一一九七〇番

溜りへおちこちの、むざん成ける次第也。
遠がの四郎の狼狽眼、表へ逃んも一筋道、
やり過して行かんづと、庵の庭に身を忍ぶ
斯とはしらぬ平太郎案内はいつも我門に、
常燈明の光りさへ、提燈の灯に線丸。詞こ
れと〻樣、佛樣へとぼした行燈が落ちて有
る。ヤアどれ〳〵。ホンニこゝえ落て有る
不思議々々々と門の口。詞母者人、申し、
漸々今歸りました、母者人々々々、コレ
〳〵線よ、母人は見えぬかあれ〳〵と樣
ばゞ樣が池へはめて有るわいのヤアと驚き
走り寄りさぐり尋れる手先へ障る繩を力に
親と子が、漸々にかつぎ上げ。詞これ〳〵
申し母者人何者が此樣に、ばゞ樣なふ〳〵
といへど應へもあら悲しや、体は氷と冷切
つたり。こりや何とせう、どうせうと、か
け出してはかけ戻り、立たりゐたり氣は半
亂。詞エ〻〳〵目が明きたい開きたい。鵜
目は何の因果ぞと、母に取付き身をもだへ
擊をばかりに嘆きしが。詞ハツアさうじや
水に溺れし体には、藥を焚いて溫むれば、
再び息を返すと聞く、チ〻それよそれよと
父親が、指圖に簑をかき集め、蝋燭の灯を
指寄て、心を焦す畑さへ、親子が心通じけ
ん、うごめく体に猶も口寄。詞コレお心慥
に、母人樣々々々〳〵と聲を限りに呼び生る。
漸々に目をひらき。詞チ〻平太郎。孫もそ
こにか。ハイ〳〵線も爰に居りまする。お
心が付ましたか、モ何奴が此所爲。チ〻何
者とは畫來たやつが。扨は衒で有つたるよ
な。シテ〳〵どつちへうせました。アヽコ
レ〳〵平太郎、母が横死は定まる業、隨分
身をば大切に、曾根の苗氏を起しなば、之
れに上越す悦びはない、隨分親子長生して
末の榮えを見せてたも、それが冥途の土産
ぞや、取分け不愍は孫の線、今一度顏をと

大及御池橋
茶道具
電話新町二六二三番

引きよせて、擊を限りのくどき言可愛いや親には思はぬ別れ、辨へなき子心にも、さぞや便なう思ふで有ろ、可愛い者やいぢらしや、又一つには嫁お柳かあいゝ夫子をふり捨てゝ歸る柳は切り崩され、魂宙宇をうろ〳〵と、覊に引かれ迷ふで有ろ、コレ〳〵魂家の棟放れずば、今一度姿をば見せてもと、くどき嘆けば平太郎、今日はいかなる惡日ぞ妻に別れ其の上に天にも地にもたつた一人の母人が、非業の別れは何事と悔みの涙はら〳〵〳〵、かゝる憂目を三熊野の、那智のお山の瀧津瀬も一度に落ちくる如くなり。老母は今はの擊の下。詞ノウ平太郎、線が事を賴むぞやと、いふが親子の一世の別れ。はかなく息は絶えにけり。重る思ひに親と子が前後ふかくに嘆きける樣子をとつくと和田四郎、後に立てせゝら笑ひ。詞ハ〜〜〜〜ばゞめばくたばる、爺めば眼がつぶれたな。さう云ふは畫うせた騙よな目前母の仇敵覺悟ひろげといはせも立てず。コリヤやい、眼れ見えぬ樣を仕てじたばたひろげば命がないぞよ、コリヤアノ髑髏は出世の種とぬかすから、何者の髑髏じや有樣にぬかせ、ぬかさにやうぬも小伜も、今目前に芋刺じや。ヤぬかしたり、うぬらが手に合ふ某ならず、コリヤ〳〵線よ、刀を奥で取つてくる、此手をちやつと引いてくれ、ヤイ〳〵其大小は引さらへ、爰におれが持つてゐる、これが欲しいか、ほしくばサアぬかせ、ぬかさゞ是じやとひらめく刄先、目先は見えぬ眞の闇、恐い〳〵と線丸、逃行く首筋引つかみ。詞サア小びつゝちよからさいなもか但しはぬかすかサア〳〵〳〵、何と人質取つたる手詰と手詰、詞エ〜此目が明てほしいなア南無權現樣々々々々々、お柳やい。ヤアやかまし

現代的

廣告は廣告社に限る

大阪市南區御藏跡町九

齋部太德郎經營

電話戎三七五六番

いわい、いつその事にこの小伜、芋刺にしてくれんと段平逆手にとりなほせば、アレエー〳〵と泣く聲に、今はたへ兼れ、詞アー コレ申ます何を隠さふあの髑髏は、白河の法皇のと半分聞いて。聞ムーよし〳〵つい一言ですむ事を、ソリヤ餓鬼めをこますと投やれば、親子が嬉しさ縋り寄り、溜息ほつとつく空に。合烏の羽音二聲三聲、雲間をさして飛んで行く。其隙に和田四郎、髑髏を小脇にかい込んで、詞白狀ひろいだ寝美、是をくらへと切り付くるかい沈んで利腕しつかり、詞コリヤどうじや、いやうぬは眼が見えるかよ。ホーアレ〳〵蟻の這ふ迄見える不思議。ヤア〳〵〳〵、そんなら生ては置かれぬと切込む刀引つたくり、池の深みへ頭轉倒、尻引からげつー立たり。詞ヤア、とー樣强ふ成つたの。チー、坊とー樣はもう目が見えるぞよ、嬉しいか〳〵、何より大事な此御頭と、しつかと渡す、後の方、這上つたる和田四郎腕をかためて切込むを心得鍬にてしかと受留め詞斯う目が明げ百人力盜人ふぜいの己等に刀を富るは及の穢れうぬに似合ふた鍬の及先、老母が敵觀念せいと、打つてかゝるをはつしと受け、やあ盜人とは案外なり。詞季仲の謀叛に組し、軍用金を集ん爲、山賊夜盜は假の渡世、鹿島三郎義連なり、猿めらが命の宿がへ、一一そつ首ならべんと廣言たら〳〵付入る早足、こなたも弓矢は手練の若者、請けつ流しつ切結ぶ、鎬を削るふゞきの空、みぞれ交りの雨の脚、踏すべれば踏留り、組づ轉んづ、三重いどみける、平太郎は多年の試、神や力を添ぬらん切伏せ〳〵乘つかゝり、老母が敵うれしやと、親子は体踏み付け〳〵、嬉しさ限りなかりける、折かゝさつと冷風の身にしみ

秋の食美
御宴會はづま
皆様位本感・いいのじ
南一溫泉料理へ

四ツ橋

お電話の御用は
南
5番・701番・711番
(長)132番・5291番
西630番

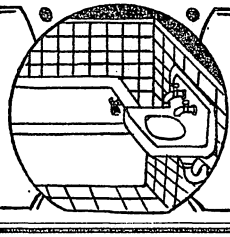
のまさなみ
南一溫泉料理

〳〵としみ渡り親子は顔をふり上ぐれば影か有らぬか線が母。詞ノウ平太郎殿、御身多年の孝行と信心の功徳に依り、月日の雨眼明らかに、忽ち敵を討たるも、大權現の神勅なり、肌の守を見給へと、いふ聲ばかり聞ゆるにぞ、初めてはつと心付き誠にふぎは此兩眼、眼前敵を討つたるも、偏に神の加護なるかと、懷中の守りより、牛王取出しよく見れば、多數の烏の影もなく。扨こそ大靈權現の、不思議みせしめたまふかや、ハア〳〵有がたし〳〵と肝にめいずる折こそあれ、またも羽音は悦び烏、飛連れ〳〵目の邊、披きし紙は忽ちに、元の牛王と成にける。かゝる奇端を三熊野の、牛王の威德末の世に、門戸に押して盜人をふせぐ守ぞ有がたき、早東雲の街道筋、木やり囃子で地車の、齟く音ぞいさましや、

合音頭　和歌の浦には名所が御座る、一に權現二に玉津島　合三に下り松、四に擂釜よ

三イ〳〵ヨイトナ。俄に車地に据りえいや聲して人夫共、押せども引けども一寸も先へ行かぬぞふしぎなる、警固の武士進野藏人さわぐな者共思ひ當る事こそ有れ、せくな〳〵と制する所へ、身拵へして平太郎、線をつれて出迎ひ、詞まで扨こそ此木の動かぬは目前親子恩愛の、別れをおしむと覺えたり、妻が靈をもいさめる爲、何卒綱を此伴に引かさせて給はなば、有がたから人と願ふにぞ　詞ホヽさこそ〳〵某もさは存ずる所、左樣ならば此柳、新宮の濱先迄、跡は

化粧タイル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水淨化裝置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新橋
岡部商會
電話新町一二六六九
阪急夙川
岡部商會支店
電話西宮一九七六

海手を流さんと、錦の袋を手に渡し。詞御頭を是に包まれて、跡より登りたまへかし我は先立法皇へ此趣を奏聞せば、曾根の家を引起し、父の敵時澄、機をもつて某が宜しう手引仕らん、いざ御用意と勸むれば、ハヽア忝しと一禮のべ、緣諸共立かゝり木やり音頭は父が役、かざす扇子もしほれ聲。合　音頭むざんなるかな幼き者は母の柳を都へ送る、合元は熊野の柳の露に、育て上たる其緣子が　ヨイ〳〵ヨイトナ。詞これやおれがかゝ樣かと、綱引捨てわつと泣き、縋り歎けば親父は、涙に聲を枯柳引けば引かるゝ恩愛の、孫よ〳〵と夕べまで、いとしかつたる老母さへ、道の街へ葬らんと、かきいだきたる孝の道。忠義に厚き藏人が、いさめて歸る都の土產、柳と柳の契りたる、連理返りや楊枝村、女夫坂とていひつたふ棟木の由來の、因緣を、語り傳へていちじるしき。

にぎり

福助鮨

道頓堀中座西横南

電話南二九一八番

四ツ橋よりの畔

九月の文樂座消息日誌

九月若手興行

△九月九日
初日

△九月十日
本日BKスタヂオより座談會（義太夫を語る）が放送されました。司會者は木谷蓬吟氏、會者江崎政忠氏、鶴澤友次郎氏、土佐太夫氏大毎和氣律次郎氏等で團平やら攝津大掾等に就て交々話が出たるが最後に和氣氏の言でマチネーの間題が出て、土佐、友次郎兩氏の說明があり、土佐氏の言として、若いこふした初めて淨瑠璃を知る人の眼耳が我等は一番おそろしいとありました。

△九月十日
朝日新聞紙上に津、古靱太夫兩者間の紋下問題白井社長の裁量に一任圓滿解決の緒に就たと報導される。

△九月十一日
大毎紙上に同じく紋下問題解決覆水盆に返ると明らかなニュースがあつた。

△九月十二日
午前十一時白井社長邸に於て津太夫、古靱太夫兩者會見白井社長、多田、福井常務打揃ふて芽出度和解の手打をあぐ、八ケ月振に元の通り三巨頭合同出演の案が決定された。

△九月十五日　文樂會

△九月十八日
文樂協會創立委員集會、經過報告等あり

△九月十九日
東伏見伯爵宮樣お成りあり

△九月二十日
協會創立總會準備會開く、加藤亨氏、江崎政忠氏、內田剛氏、井上周氏、川畑市會議長福井常務其他出席あり。

△九月二十日
本日九月興行打上げ

△九月二十一日
九月興行に於ける秀拔のつばめ太夫、相生太夫、芳之助、清二郎に木谷蓬吟氏よりそれ〴〵賞狀と記念の品名人太夫の床本朱章を贈らる。

大阪 歌舞伎座

新築一周年記念興行

十月一日初日

晝の部　夜の部・絶對的名篇揃ひ

東西合同大歌舞伎

假名手本忠臣藏

足利家表門より一力茶屋場まで

第一 堂島繁昌記 三場
大阿闍代子作大阪歌舞伎座開場記念
厨洲與舞臺記念サンデー毎日懸賞當選脚本
山口草平衣裳考案並演技

第二 史劇 名和長年 二幕
幸出露伴作

第三 道行浮塘鳥 清元連中
おそめ久松
清元喜久太夫・梅吉胜中出演

第四 心中紙屋治兵衛 河内の掛合 二曲の内
玩辭樓十
清元喜久太夫・梅吉胜中出演

第五 釣女 常磐津連中
常磐津文賀太夫左喜太夫文左衛胜中出演

ウインタースポーツのトップ

大阪 歌舞伎座 アイス・スケート場

愈々十月一日より開場

毎日午前十時 日曜・祭日午前九時

京都アイス・スケート場 京都市河原町三條上ル

十一月上旬開場

中座

東京新派總動員

一日初日

・畫の部・

第一 與太者とお月樣 八景

第二 濁り江 四場

第三 後篇 生さぬ仲 四幕

・宴の部・

第一 城山落城の日 二場

第二 女浦島 三場

第三 瀧の白糸 一幕

浪花座

一日初日

道頓堀進出第二回 前進座

第一 次郎吉流れ星 三幕九場

第二 馬 一幕七場

第三 超人電飛佐助

角座

一日初日

貞樂九貞樂の握手

喜劇 喜樂會

第一 笑面と澁面

第二 明らかな水兵

第三 丸八

第四 秋來りなば

松竹座

近日封切

4 1 9 號室の女

夢みの唇

グランド・ホテル

戀の凱歌

驚き鷹

ジェニーの一生

散り行く魂

朝日座

近日封切

東京音頭

女人哀樂

理想の良人

嬉しい頃

鯉名の銀平

大村鐵太郎

放涙の名君

醉ひどれ菩薩

辨天座

近日封切

新らしき天（後篇）

青春街

その夜の花嫁

母三人

焔魔地藏

飲鬼三人旅

晴れ〳〵左門

燃ゆる富士 解決篇

昭和八年九月廿八日印刷　大阪・四ツ橋・文樂座
昭和八年十月一日發行　編輯兼發行人　大塚良三　編輯　成山桂三
大阪市西區土佐堀通二丁目　印刷者　永井太三郎
大阪市西區土佐堀通二丁目　印刷所　永井日英堂印刷所

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します御座席では御遠慮下さい

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雜いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黑札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席券は

各自に御持ち下さいまし、切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は場内にて

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由にお飲み下さい。

出演者

寫眞撮影は絶對にお斷りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種備物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります

御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ゐますから御使用下さい。ムシタオルはレートローション使用。

四ツ橋　文樂座
前賣切符專用電話南四七一一番
電話南　七四〇八番　三七八八番

菅原傳授手習鑑

妹脊山婦女庭訓

心中天網島

三十三間堂棟由來